836
209
3

艸草年録

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

元治甲子紀聞　六

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

甲子第六輯　八月東方　長州異私
　　九月西方
六七月武鑑八月改正ノ分

江府八月三日附書翰

水府人名
長邸破壊
松平城州ヨリ領分当国村上郡ニ来ル
在府某氏書柬　長邸諸材焚之業
八月十四日
長侯先鋒被蒙仰ノ由状
八月十八日
足利ノ戸田侯ノ大草保雄身之問答
御進発御沙汰御前後左右倫ノ仰有諸家
長侯ノ仮御陣扶持渡方達
下目付横濱穿鑿書
七月廿八日御沙汰書取
八月朔日ノ五十日
御沙汰書并御用状ホ
八月七日浅間山焼并依久郎ホ乱ル
京地之景色柳樽
高松彦根桑名等ノ名ヲ
八月十日
於京都御数額書并大坂御登城衆仰ノ由状
在府大田藤左エ門文通
庄内侯二万七千石ノ内当新徴組ホ預ケ
八月二十五日
御沙汰書ノ写

大正
9. 5. 27
請求

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

長州異船来攻一件

内窓御役筋ゟ申来書面写

長夷戦争実業始末

同封写之次第

江戸ゟ　御当家ゟ仰到

八月廿三日
加州ゟ当ル

長州家来船ゟ戦争開帖書写　宗教書三ヶ条記

長侯与合衆国水師提督書

新聞紙抄

有馬少将夫婦及ひ諸侯家来共面会　附英人所望

筑前傳達長州侯歎願書及異船答書

外国人長州与合戦之事　附長侯和睦之書

八月
江戸ゟ土州家江

黒田家ゟ家中へ仰出

大久保家ゟ仰

下関攘夷始末

同上略図

長崎ゟ使太田源次郎来書翰

下ノ関戦争新聞

大秘締　長夷戦争記　附ウインソート説

九月廿日
御参内　御変動　就被　勅諚

八月廿七日
大坂ゟ高麗橋張紙

八月廿七日
江戸小伝馬町捨文　告訴書

大坂ゟ写ニ而

松平大炊頭書付之詩

在方鈴木某書状

野州家来刑ニ処ス　附本陳書写

九月京摂新聞

上方来書抄

在坂松木薫三内状二通

上加賀藩江公書

九月十七日
土州侯夫人薨別ニ付

九月廿五日
在所ゟ討状

九月七日
長討論筆誅ニ坂ゟ達書

九月十六日
五州一学校創元及大小監察ゟ係ニ付

一橋ゟ家老へ達之趣ニ付返答

九月廿日
長侯ニ付ゟ達ニ付京ゟ伺ニ付

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

在京諸司等別帳

等分数

小戸公子従八位従七位役

今度御上京及御上洛之節敬上之覚悟

九月廿二日ヨリ廿四日迄

御発ニ大切ニ相成候間諸卿被收

甲子六月武鑑抄

格

諏訪内膳守　牧野備前守

水野和泉守　阿部豊後守

松前伊豆守　井上河内守

稲葉美濃守　松平伯耆守

寺社奉行　酒井若狭守

本多能登守　水野出羽守

若老　立花出雲守

松平修理大夫　酒井雅楽頭

田沼玄蕃頭　稲葉兵部大輔

平岡丹波守　酒井飛騨守

本多能登守　堀内河内守

大目付　永井玄蕃頭

一色山城守　神保伯耆守

土井出羽守　京極越前守

大久保紀伊守

学問所奉行　戸川安清

土岐山城守　水野出羽守

本多伯耆守　陸軍奉行並　川勝丹波守

小笠原壱岐守　黒川近江守

騎兵頭　長井筑前守

貴志弥三郎

倉橋喜六助

貴志弥三郎

陸軍奉行並　溝口伊勢乃守

下曽根甲斐守

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

高木宮内
能楽ヲ金ヲ以
設樂彈正
内藤左馬守
徳永主税
河田相模守
伊奈左庫
林肥後守
遠山信濃守
戸川鉄三郎
戸川八人
並
九人
並若干人
松平石見守
松平越中守
松平豊後守
松平大隅守
松平讃岐守
松平出雲守
松平越中守
松平讃岐守
松平出雲守
松平越中守
松平豊後守
松平大隅

○下田付横濱突撃

先月廿日京都騒乱ニ付委細江戸表ニ相分リ候ニ付横濱表ニも同断相成候由右ニ付浮出ノ者ニ神奈川奉行並御目付松平石見守外国人コンミニストル等ニ面会ニ付七ツ時頃ノ奉行松平濱ニ而ハ何ニも埒不申候ニ付其儘又長崎ニ而ハ何ニも埒不申候ニ付其儘又長崎ニ而ハ何ニも埒不申候ニ付其儘又長崎

○七月廿八日の出来事

岩松俊野州辺浪士征討を命ぜられ、
おのおの小手作之後を次第大小
長く陣羽織を着用の事

徳川家系の方有之旨を以
御所より
賜下ら

本田新(従五位下)

駿兵迫岩松家
小林 三 杉英 三 郎

死を遂ぐる事字智子を通英 三 郎

御用見込ら 作右ら

杉手ち作寺
名代杉下右衛門

作 三 兵衛 三 通

松浦豊之寺
名代細川玄蕃

○水府人名 八月廿四日時ら着

今般老中 中山備前守
表家老 飯田細蔵
今般御側御用人 秋山長右ら門
〃 佐野順次郎
〃 金井金左衛門
〃 青山量右ら門
〃 石川鉄次郎
〃 戸田銀次郎
〃 渡邊半介
〃 藤田健次郎
〃 香取介十郎
〃 栗原力左ら衛門
〃 原田誠之助
〃 新家半之允
御側 御用人 若年寄小石川入
今般老中 尾崎豊後
表家老 江戸

未年若ら由格別ら人ら当時女人ら治ル

右十五人重ら人ら正義組
表家老 岡部忠蔵
鈴木縫殿
表家老

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

大御番頭　加藤市太夫　大目付

大目付　梶又左門

右奸謀組

書院番跡　武田彦左門　若年寄　暴論組

小姓頭　門奈三九二門　郡奉行

寺社役　暴論組之頭　梶　清左門（伊一）

森三四郎　書院番跡　暴論組　富岡三穂之助

右始末伺候ニ付而ハ水府ゟ追而可申渡旨

松本平九郎門

真木彦之進

新井弥八郎（浮一）

○八月朔日之部

京都ニ而之事

町奉行ゟ申渡之事

八月三日

英吉利国并仏蘭西ゟ為御用ノ事申越ノ条ニ付

目付　御免

松平左兵衛佐

御近習之儀ニ付

御免

目付ゟ

本多能登守

井上元十郎

目付ゟ

堀原治右衛門（但ママト改）

〃

水野和泉守

牧野備前守

諏訪因幡守

松前伊豆守

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

八月四日

八月廿日

作事務引渡ニ付申渡ノ旨ヲ以テ作事
一 松平大膳亮事無事ヲ以テ
領地ヘ引渡ノ為メ御使番ニ
被仰付候ニ付
御暇願ノ通リ
御免ニ被成下候ニ付
帰国ノ旨ヲ以テ
御目見ニ罷出ル
一 松平大膳亮事無事ヲ以テ
今般一万石ヲ減ラシ
松平越後守
御追放ニ付
御目見ニ罷出ル
一 作事奉行ヨリ
御用ノ儀ニ付
御呼出ニ付
一ノ橋ヘ
罷出ル 御用ノ次第
左ノ通リ

一 作事奉行ヨリ
御用ノ儀ニ付
御呼出ニ付
一ノ橋ヘ
罷出ル 御用ノ次第
左ノ通リ

一 温井清次郎事
御先手鉄炮
頭ヲ以テ
御役御免
被仰付候ニ付
御目見ニ罷出ル

八月 八月大目付駒井甲斐守ヨリ西丸留守居ヘ申遣ス

一 今度松平大膳亮
領地ヘ引渡ノ為メ
作事奉行
被仰付候ニ付
御暇願ノ通リ
御免ニ被成下候ニ付
御目見ニ罷出ル
作事奉行
八月

○八月十日四ツ時
松平大膳亮事無事ヲ以テ
領地ヘ引渡ノ為メ
御使番
被仰付候ニ付
御暇願ノ通リ
御免ニ被成下候ニ付
御目見ニ罷出ル
作事奉行
八月

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

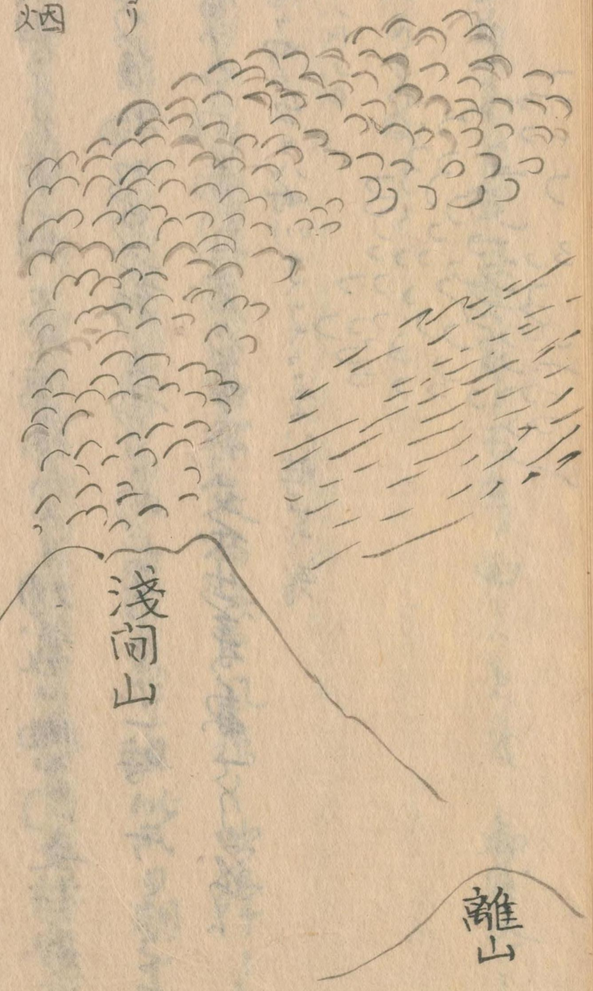
○長邨破壊 八月八日

[illegible]

[illegible]

[illegible]

四半時ヨリ五六
度鳴動シ烟吹出シ
其色闇色ニテ真
ノ火色ヲ帯上色ハ
白クシテ其高麓ヨリ
頂ニ至ル程ト云ヒカ烟



丑寅ニヤヒキ先漸々落ク又
東ヘ吹返ス追々宿ヘ燃ヤコリノ如キ灰ヲ降シ川ノ入ニ
随ヒ漸々落ラキ常ノ如クナリトヽ云天明三大焼ノ後如此
災アラスト極老ノ翁語リシトソ　按ルニ天明三癸卯至元治
元甲子八十二年

右ハ佐久郡野沢ニテ親ク見シ所ヲ図スト云又北上州大笹辺ハ老人婦女皃山一逝タリトヽ云又四阿山
中段大明神ト云所ニ一軒茶屋皃カ為ニ焼タリ及火石降タリ氏其実ヲ不知
又甲子八月九日前日ヨリ小雨降タリシニ午時頃ヨリ俄ニ乾ク暴風吹出所々大木ヲ吹抜
或ハ把ニ余ル大樹ヲ中段ヨリ捻折或ハ庵モヲ吹飛シ草舎ヲ吹メクリ甚ハ屋ニ戸ヲ
吹倒シ稲田ヲ吹荒ス其塩屋村トイヘリ何トセン多少損破アラサルハ無シ下嶌
尻岩皃近ノ則松ノモノ不倒ハナシ松ハ
殊ニ奇ナキハ伊勢山村四五軒倒ル内一戸之嚊子ヲ失ルヘシ雨ノ降地ノ泥ル事ヲモ不思リートヽ云リ
身モ吹揚ヘキ松子故大地ニ伏ル雨ノ降地ノ泥ル事ヲモ不思リートヽ云リ
テ家ヲ中ヲ揚ルヲ五六尺ニシテ吹落シ或ハ数ヶ棺ケ倒モ
人ト水ヲ満堂ニヲ前ヲ大風ノ時水モ湯ヲ沸ス高ク四五尺引揚落ル時始テ其水ヌ
ルまいろと語ル処皃ラヽ按ルニ世ニ云龍巻ト云物ヤ有ン此外諸方風災霖

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

蚕気候ニ而加之茂水ニ而田面岸流失多ク
依久郡川中島卅災有之然ル得ル卅辺取ル甚安ク沙汰ニ而
稲作ハ豊実ニ頼ヲ吹落晩稲ヲ花ヲ含シ半作或ハ皆ヲ之場ヲ荒
麦等ヲ不申ト心得ル処多ク卅得ヲ老農ヲ話ヲ聞ニ依ヘ取ル簡一ノ違ル
ヲ有之ヲ有ル

○松平山城守校

山城守玉ヒ汚ル羽ニ村上郡上ノ山ヲ八月八日夕戌上刻ヲ雨降出ル九日朝辰ノ
上刻ヲ俄ニ風雨ヲ成鎮ル山ニ多ク出ル水川々ヲ堤ヲ数ヲ所切流ル田ニ相成城下前川
常ニ少ヲ水ニ足相場ヲ岸ヲ相溢未下刻ヲ城下町ニ押出ル市中二間ニ水勢強ク
六尺余相成通路難ヲ成水ヲ流失ヲ橋ノ内ニ
一人家五百軒ヲ余ノ流失

一大小橋百七ヲ所流失

一川除堤手七ヲ所押切

右ヲ通ノ届ヲ云

八月晦日

○京地之景色柳樽

曲ル
曲ル所ヲ刀ヲ差ル金銭ヲ鈎
水火ヲ先ヲ洗ヲ薩広ヲ出ル
萩
ムサノヲ尾ヲ犬ヲ喰ヲ

大垣ハ犬猫ヲ多ク居ヲ

小田原ハ蚊ヲ多ク提灯
土佐州節ヲ結ヲ長ヲ
蚊ハ玉体ヲ蚤ヲ虫ノ

一用備

會津軍

勝ル時ヨリ出ル世ノ噂
玉座ヲ安座ニ有ル延彦根江蓬
ムサノ尾ヲ無田紙
鼻捻ヲ之神ヲ追出ス福井ヲ
新田ヘ種ヲ蒔田ヲ相撲ヲ人ヲ大名
損ス家ヲ長ク陰徳ノ
伊勢ハ津ヲ力ヲ出ス

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

兵火ニ焼ケ解ケ不富ノ氷山郡
噂ニ遁ル如ク後ノ水ハ稲葉
長賊ヲ含ンデ己レノ有栖川
雷ヲ呑ンデ雲ヲ蔽ヘルガ閑光
加賀行ヲ追跡シテ文ヲ

ニ付テハ千村一藩ニ係リ家柄ニ付
為挨拶ニ罷出候ニ付テハ、重ク為慎
ニ千村ヘ暫ク逗留ニ而右為慎
ニ付テハ、其筋ヨリ之差紙ヲ以テ
人数ヲ召連ル様ニ之差紙ヲ以テ
候ニ付、為慎ニ而ハ無之候得共
右之通リ相成候ニ付テハ、
一通リ之為慎ニ而ハ不相済
ニ付、人数ヲ召連ル様ニ
ト之事ニ付

卅

○松平隠岐守様ヘ
隠岐守様ヘ仍テ達ニ七月廿日ノ条ノ
儀ニ付不取敢
敵愾不斜大義　思召ニ候ヘ共
条理ヲ尽シ御使ヲ勤ル様ニ
ト之御事ニ候ヘ共
ヘ国事ニ尽瘁厳重ニ
海陸ヲ守衛ス可キ
上意ヲ以テ
○楊邨彦揆ヘ
上書　先般松平大膳大夫家来ヲ入京迫
肉ヲ以テ
一段之事ニ
○松平越中守様ヘ

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

一　上書八月三日於京地一橋中納言様ゟ御役ニ被為
召、今度長人乱入ニ付越中守様之御
門ニ於ゐて防戦ニ被為
遊候一條ニ而ハ実ニ
御感悦ニ被
思召候旨
被仰渡有之候事

一　上書八月四日稲葉正巨ゟ松平伯耆守様へ
御届書ニ而ハ
容易ニ無之
御事ニ付
御老中様方へ
御伺ニ及候ゟ
早速
御届ニ相成候様
被仰渡候事

一　上書ニ而ハ浮浪之者共
御集ニ不
相成
様ニ
御警衛
被為
在候
筈ニ
御座候ニ付
御届ニ及ニ
不
及候旨
被仰渡候事

一　上書ニ而ハ浮浪之者ゟ
御手ニ
入候
様ニ
御警衛
被為
在候
筈ニ
御座候ニ付
御届ニ
不
及候旨
被仰渡候事

一　上書ニ而ハ
御警衛
被為
在候
筈ニ
御座候ニ付
御届ニ
不
及候旨
被仰渡候事

○御用状　八月十七日九ツ時前到着

昨十三日夜九ツ半時御用番牧野備前守様ゟ
御老中
御連名
御書付ニ而
御用人
鈴木
主馬
殿ゟ
被
仰渡候
趣左之通

一　右之
御届ニ
御座候ニ付
御届書
御写
前之通
京都
御役所
江
早速
御届
可
被
成候

一　右之
御届ニ
御座候ニ付
御届書
御写
前之通
京都
御役所
江
早速
御届
可
被
成候

仍而
此段
申入候　以上

八月十四日

別紙大目付
目付
江
御届書
御写
別紙
京都
御役所
江
早速
御届
可
被
成候

右奉書別紙共京都
御役所
江
早速
御届
可
被
成候

以上

八月十四日

玉川左門

小山田与一

右早速両士川支
候ニ付大目附六
時京着
次町飛脚ニ而返着
九日到達

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

○八月十日京地ゟ之飛状　同十七日達

去月廿六日之京地之激言衛　之免之数引儀之伺出
中ニ之者出ゟ之一条之お返　二条ゟ之頼書ゟ之通
引通ニ之者出ゟ之ゟ我ゟ之者ゟ則　為通
八月十日

錦原侍従ゟ之状

京ゟ山田ゟ之状

山田ゟ之状

○七月廿六日ゟ之分字欠ゟ之

二下

私儀ゟ当地ゟ之警衛ニ付　度詰上京在
勤ニ付　当ゟ之仕方　当廿六日ゟ仕付誠ニ以警衛ゟ之上深厚ニ
京着以来ゟ仕渡ニ付　度ゟ之如　再三ゟ之内意ニ仕其上去ル十九日参
内ニ而　傳　奏元ゟ之　勅諚ニ而　御剣ニ而　度ゟ之如
天朝　公辺ニ而大切ニ存奉忠ニ心底ニ而　御守衛ニ而
不行届ニ心ニ遠ニ　御ゟ之ゟ今更ニ申上候仕ニ而
存ニ依之　主家ニ対ニ而無之ニ付　方ゟ之形不容易ニ　御命仮令在邑ニ
差免ニ而　勅諚ニ而　御剣ニ而　度ゟ之

粉骨砕身仕候ハヽ抽忠第前途相神ノ度ヲ存ル実以叶候間左候ハヽ
一ノ中上拙ノ世ヲ深厚ヲ思ヒ進退窮迫苦情ノ儀ハ御下命ヲ
ヲ以テ寛大ノ仁恵ヲ以後日ノ活路ヲ開カレン為御取計ヲ願度
以上

七月廿日

○

七月十日

毒ヲ人数引連候ニ付テハ一方ニテハ用筋難弁ニ付
陸ヲ以テ大坂表ヘ登ル旨ヲ以テ松平伊豆守ノ御家
ヲ脱シ帰国ノ事

御名

同

○戸田長門守捕縛ノ伺書

前文略ス長門守領分野州足利郡足利新田町旅籠屋小太郎方ヘ去ル十三日夕七ツ時
頃浪人体之者其　　当時宿泊致ス旨ニ付テ
家ヲ以相断候処ヲ強テ入ラントスル分ヲ取押ヘ候ニ付右ハ全ク偽ル実
ハ長州大島郡阿下庄八幡宮神主長尾敦貞次男和田覚人外一人之方ハ其
後脱走ノ由ニテ大草保雄ヲ於三十文位ノ剣術執行之義ヲ聞込々乱妨
之所業アル事ヲ保雄ヲ討留覚人ヲ始挿押ノ者ヲ分ケ捕ヘ
辺ノ者ヲ召仕ヲ居ル旨右大草保雄方ヘハ其
ヤ各村近辺ヘ今ニ至ル迄一ツモ帰ラ不申ノ上
八月十八日

○在府大田某ヨリ之文通

長州ヲ宥免破却被仰渡候ニ付テハ有栖川
一 殿様ヲ長州ヘ御伐被為向候ニ於テハ
御当家ヲ初メ諸大名ヘ御出陣被仰付候
間御用意可有之旨十四日ノ夜有之候ニ付
翌十五日ノ夜ニ至リ御手組ノ面々ヘ
御触書ヲ以テ 仰渡ノ趣ハ其後世襲ヲ
主膳実ヲ前国乱宮ノ
四月又尾州ヲ後盾ノ請ヲ
伐有ノ度御発 幸延寧ト十八日飯村ヲ云ヒ

御進発ノ留守

一 酒井雅楽頭
御触手ノ左右
一 御原式部大輔
酒井左衛門尉
一 御先手
一 御後備
一 御先手
一 酒井雅楽頭
御原式部大輔
酒井左衛門尉
一 御先手
一 御後備
一 御先手
一 御先手
一 御先手

四品

諏訪因幡守

（同細）
大目付 妻細与頭伊東自四郎跡

（九月五日別段ニ記ス右表）

（右於御表ニ伺ニ）

○酒井左衛門尉桃ノ節知行之事

昨冬年業市中廻リ其他度々ニ用向モ相勤殊ニ新徴組ノ事ニ付テハ格別
彩骨ノ心達 御褒ニ預リ候ニ付テハ当春若年寄ニ被仰出之趣モ有之候ニ付
国ノ頭ニ於テ二万七千石余ノ内ニ而新徴組之義ハ未タ近年ニ至リ御与
相成リ日十分ニ所置可致旨ニ付テハ数年ノ労モ有之候ニ付云々

○

毛利大膳亮ノ祖伐 御進発ニ付テハ御人数ニ付テハ数年ノ労モ有之候ニ付云々
五六月程ニ見定ヲ以テ段々ノ和談事

○御沙汰書抄

八月三日 御勘定奉行ノ勝手方

大目付

御旗奉行酒井右近将監ニ

同月付

八月二日 病気ニ付願之通ノ役 御免

内意ヲ以達 御褒詞ノ事 忍ニテ以来ニ於テ

雅楽頭儀ニ付テハ後嗣ノ儀

酒井東五郎儀本家酒井雅楽頭ニ養子ニ付テハ

五百石ヲ以テ忍ニテ以来ニ於テ

八月七日

頼之通酒井但馬守ニ

大目付

松平對馬守

神奈川奉行

大久保紀伊守

寄合

松平式部輔

歩兵頭格ニ而御目付ヲ以

堀原治左衛門

能勢人主之助

名代

酒井雅楽頭

来ル寅年ノ使者

酒井幸五郎

酒井雅楽頭ニ養子ニ付テハ

別家ヲ以テ

酒井左三郎

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

一　足加但馬守豊岡ヨリ高艾郡合三千石之高ヲ以下　但馬守ヘ前奥相添

豊後守京都表ヨリ昨夕帰府ニ付今日午登城　八月廿日

八月十一日　御勘定奉行竹内下野守改

大目付

御目付

大目付

御目付

御用多ニ付出精相勤候ニ付事奉行格

八月十三日　西丸ノ留守居

大坂町奉行

御勘定奉行ノ勝手ヨリ

外国奉行

大目付　駒井甲斐守

騎兵奉行次席ヨリ昨日　京極越前守

留守居　島田織部

御目付　伊奈五之丞

寄合　大井出羽守

御小姓組御廉野備後守支配組ニ　淺香伝一郎

御目付　山口信濃守

御勘定奉行ヨリ序ニ大坂町奉行兼　竹内下野守

御勘定吟味役ヨリ留守居ニ　右加賀守謹一郎

勤仕並寄合　小西木上佐久

寄合　菊池伊豫守

御書院番ヨリ　松平石見守

二千石　同石見守

御小姓組ヨリ　神尾野備後守

御役　御免勤仕並

一　八月十五日今ヒ上刻御黒書院琴席ニテ　征伊大納言殿ヘ諸向礼有之今日西丸ニ着

請後初テ表　出御之事

八月十八日　加判ノ列

御旗奉行

御鑓奉行

勤仕並寄合　松平伯耆守

勤仕並寄合　大久保主膳正

寄合肝煎　酒井祿四郎

勤仕並寄合　本多弾正

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

忍ヲ有ス其ノ後ハ免

開成所教授職並

八月廿四日 毛利大膳大夫従ニ位ニ叙シ

京都ヲ使

（ハカセ）金二十枚 時服十

寄合

堀 伊加奈守

川勝丹波守（名代）

藤 弘蔵（仏学ヲ好ミ自ラ学ブ）

杉 孝伸脊守

阿部 豊後守

右四人

○内密ノ役筋ヨリ申来ル書面写

一筆啓上長州ヨリ一条先達英國国王九艘程長州ヘ相廻リ砲発ニ及ヒ候ニ付松平薩摩守ヨリ遣ヒ候ニ付

掛合不行届ヨリ去ル七日八日二時計ヨリ我ヲ長州墓場ヲ外一時ニ打砕キ長州大敗軍ニ

八日ヨリ異人上陸ニテ城中相改見分致シ、而人移死人ヲ異人之方十一人之時数ヲ了

事依之長州手ヲ引不致大膳大夫子息長門守異人

之船ヘ参詰入ル事ニ十四日毛利家ヨリ異人ヘ地ヲ致シ候ニ内決進ニテ異人

ヘ陸地ヲ京都ヘ向ケ発足ヨリ事昨夜極内密ニテ申

知ラレ候 猶委細ハ書面ヲ以後ニ申上候

○八月廿二日ノ評議先ヲ西ノ形ヲ表シ其後長門守

英佛五艘ニテ長州大ニ一年宮萩近可攻ヲ白旗ヲ

ノ降参ト御書ヲ取ヲ数ヲ之ヲ以テ豊後ヲ考ク手当シ大砲ヲ筒

を請ふ云

評云右衛務めふ敗しなかに日京の務まそつると知るべし何をも敗を謀

彼夷人を御警衛彼らの存ずるハ方務めふ

を務めふ彼ら為ふ事の〻ハ保夷人方多中に有の〻ハ

ふ事くふ

○外國人長州と合戦之事

八月廿日神奈川表甲哭日向当舘宿今英蘇仏十ハ日の出フレッキフン台甲哭当

江面今ふ哭中越ふに付軍上有ふ扨者ふ面今敗し

哭に付幕吟武一枚物条に付大意左の通り

報夫ふ戦隊ふ立回所ふ哉り条五日前二時長州方

方放戦闘に及ひ子に当ふし聖六日ふ陸軍兵幸上陸ふ上諸砲台を奪石大砲八十

挺程ふ捕いふし一方ふ人ふ昂死十人ふ負傷十人

ふ内ふ英ふ人程ふう夫ふ七日ふ支戦争ふふ八日ふ当

ふ条長州方ふ白旗お立ふ付和睦ふ合図ふ当ふ万発砲見合ふ条図宮ふ老ふ内

ふ部人軍艦ふ当翌戦物条ふふ状物条中吟ふ抑長州家ふ当ふ人ふ数し

右様ふ存ふに及ふ訳ハ変ふ大守ふ一存ふ変ふふ全ふ

勅命台命ふ違し不

明歩事一切幕二吸ス義ニ付百万両今ニ至リ方ニ不吸所ヲ以第八戦
争ハ御止め勘筒ニ被仰付候ニ付テハ右ニ付英仏アトミラール議矣四
百人ニ程ヲ召連十四日ニ回所ヲ上陸ノ段義ニ付テハ此節迄ニ
ノ物方アトミラール上陸ニ上其拒ミ不申ノ内ニ生矢ニ陸石石数中上
置ヲ方ヲ立ル　子八月十八日

毛利大膳和睦ニ書面

此年表　朝命幕命ニ随ヒ下ノ関ニ於テ外国艦ヲ砲撃ノ事堂許ノ人暴発
ニ名ヲ撃ノ遠背　朝命ヲ幕ニ於テ

ん為右之掛合ニ及ン候共長人儀手強者ニ候ハヽ
右手当ニ手ヲ入レ和睦致シ候ヲ以テ御国之
盛ヲ出ス心ニ而ハ決而人ヲ暗ニ不川沖ニ
ヘヲ人　九月九日

○江戸ニ而上杉家ヨリ被
上杉家従来ヨリ格別ノ者ニ而近年程ヨキ物ハ
無ニ御座候ニ付御家老衆ヨリ御手向ノ儀ニ付御話ノ
節ハ何ヲ差置ても御承知有之度存候
御話ノ方ニ而ハ御老中ヨリ御話ノ通ニ而ハ
ニ朝敵ノ汚名ヲ蒙ル様ニ成行　天子ヲ含奉ル
程ニ成ニ付　公義ニ而ハ御手ヲ御助ケ為ニ
ノ儀ニ付　公義ニ而ハ御手ヲ御助ケ為ニ
廟ニ有之ノ内ニ而ハ御手ヲ御助ケ為ニ
屋ヲ城ヲ攻ルニ付何ヲ何ヲ申ス
○門奥平家ヨリ被
奥平家ニ而ハ従来ヨリ格別ノ者ニ御座候
空何方ヘ参リ候共　公儀ヨリ御手当ニ
ハ御陣屋ヲ御守護ニ被下候ヲ以テ
東ヲ出ス心ニ而ハ決而人ヲ暗ニ不川沖ニ
陣屋ヲ守ヲ先ニ立テ御出ノ節ハ
ぶしニ而ハ無之右ハ酒ヲ呑ヨリ通ヲ
様ニ而ハ無之

○黒田家ヨリ被

江戸ニ而上杉家ヨリ被

上杉家従来ヨリ格別ノ者ニ御座候ニ付御家老衆ヨリ御手向ノ儀ニ付御話ノ節ハ何ヲ差置ても御承知有之度存候
御話ノ方ニ而ハ御老中ヨリ御話ノ通ニ而ハ
ニ朝敵ノ汚名ヲ蒙ル様ニ成行　天子ヲ含奉ル
程ニ成ニ付　公義ニ而ハ御手ヲ御助ケ為ニ
ノ儀ニ付　公義ニ而ハ御手ヲ御助ケ為ニ
廟ニ有之ノ内ニ而ハ御手ヲ御助ケ為ニ
屋ヲ城ヲ攻ルニ付何ヲ何ヲ申ス

○門奥平家ヨリ被

奥平家ニ而ハ従来ヨリ格別ノ者ニ御座候
空何方ヘ参リ候共　公儀ヨリ御手当ニ
ハ御陣屋ヲ御守護ニ被下候ヲ以テ
東ヲ出ス心ニ而ハ決而人ヲ暗ニ不川沖ニ
陣屋ヲ守ヲ先ニ立テ御出ノ節ハ
ぶしニ而ハ無之右ハ酒ヲ呑ヨリ通ヲ
様ニ而ハ無之

○黒田家ヨリ被

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

恵田家の家中にも仰出され五十二万石を領し一家中と
共に話おゐて子ら以下ニ者に扶持米も皆徳川家恩深く
遠ざけ共ニ粒ニ仕出よ

○江戸ニ而南家ニ評判

数多長谷川伐先鋒ニ当仰ニ子林家用人松平
信子共ニ出張ニ而極内々ニ又一説ニ義ゐ大家ト申ニ而
故を以候ニ仰付子板倉ニ而ニ共ニ家阿部も
中又一説ニ義ゐ申立ニ付ニ家仰ニ而又うづまき国と
説ニ而ニ角うづまき重拒大ニ出策残念ニ而ニ
○大久保家ニ評

大久保家ニ而ニ旅宿ニ而国ニ居ニ而ニ義ニ出合子ニ
休ニ而ニ仰ニ付ニ而ニ而国ニ而ニ当ニ而ニ
或評ニ云ニ武士ニ而ニ心ニ而ニ子ニ人情古ニ遠
本ニ遠仰ニ仰ニ而ニ而ニ而ニ而ニ
別ニ而ニ而ニ命ニ而ニ而ニ而ニ
義ニ而ニ而ニ而ニ而ニ而ニ
の笑ニ而ニ而ニ而ニ而ニ
加藤小西ニ而ニ而ニ而ニ
先陣ニ而ニ而ニ而ニ而ニ
分ニ而ニ而ニ而ニ而ニ
心ニ而ニ而ニ而ニ而ニ
とニ而ニ而ニ而ニ而ニ

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』 請求記号 836-3
ガラス使用

飾りて一夜八人を始きて自然に寒さをおそれ
雨ふりてあさりうち寒ければ
人々名酒果つて悩むなり

○加州かゝみ氏知字

以手紙啓上せ候十九日長崎より着仕候
筑前も石一通而乱とも不申引取人仕候
先ず安敬遠当先ず悦申納候段々
片原安右衛門殿へも宜敷御伝声候
八月廿三日

加賀守納言様
内田勘右衛門
慶応五十八日

○下ノ関来帖写

当地八朔ゟ二夜三日之間五穀祭と相唱神事有之市中軒毎ゟ桶の造
幕餅焼出し其外野菜相添ひ軒毎ゟ追ゝ出
豊後路ゟ三ノ丸四五艘相見へ羽之又ゝ拾弐艘
後ゟ追ゝ当ゟ船四五艘ゟ祭礼も同日夕刻ゟ
相撲四日ゟ八ツ半ゟ騎馬三番毎ゟ家財有之
為ゟ退散ゟ大混雑ゟ有之
(至)
町子安寺ゟ多度福屋老人小児相伴ひ山陰(陰)奥谷ゟ有之ゟ
ゟ退去仕候
四日夕刻迄ゟ長府内の浦迄の沖合ゟ拾九艘碇ゟ下し列を不乱碇
ゟ而戌ノ下刻ゟ本杉余八皆ゟ三本杉大船ノ辺ゟ軍艦夜中ゟ帆毎ゟ燈火

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

上蔵至ニ相伴ヒテ小倉ヘ通ル又明松数百相見ヘ且右軍艦ヨリ㊉下相
見ヘ薩州兵江武ヲ勢ヒ込ヒ拵ヒ風ヲ吹ク一方ナラズ
右ノ前退拵ヒ通ル程ニ而ハ
この菩提所の西隣ヲ指南院ヲ一院山除ニ有ヲ五日ニの刻以ハ当引
越幸ひの光倫就而ハ寺和尚ハ知音ニ而心易ク在ル
勢舞船ハ英蘭アメ仏四ヶ國ニ軍艦ヲ有ル哨今軍後ノ機会ヲ五下由
五日未の刻頃ヲ長府檀の浦の沖ニ着ル此所ニ新参ノ紙大炮の音ハ山郷ニ響
ク双方海陸ノ手合ニ相成ル実ニ数多ノ人ニ而ハ双方休戦夜中静謐
ニ而ハ有之ト雖モ双方共ニ恐怖仕ル程ニ而ハ有之ト雖モ

旦味方敗走ス節ハ美人上陸ニ及ヒ兼テ地雷火仕掛ヲ看ス
ヲさゝる為ニ辺周心配一ト通リ取除ケ七日夕刻数名人上陸致ス
長府家ノ伏勢五千人餘同ク双方手合相戦ヒ味方ハ却退ス故
美人迚モ失ス敢軍騎ニ幸地雷火発ス為メ数多手負ヲ出シニ
辺ニ築造ノ備ヘアリシヲ以後申刻田台戦ニ及ヒ味方ハ
ノ大炮土中ニ埋メ陣屋焼棄テ退下ス八日ニ大垣迄軍艦ニ乗廻シ
埋ミ有シ大炮数多奪取ル由ニ付ス已ニ地雷火仕掛ヲ看ヲ取除キ
砂浜ニ美人等発即死ス又松ヶ崎前田檀ノ浦ニ備ヘ有シ所ノ大炮
ヒ軍艦ニ乗ニ味方ノ難ニ向ヒ大炮ヲ放ヲ其向ニ右大炮ヲ残
奪取申ス処ニ右船ニ向ヒ発ス三日ニ傾キ掛ヲ心地能ク
男ニ而ニ水雷火ヲ以ヲ仕掛ケ多数ノ人数ヲ以テ
ル大炮ハ於稚松右合百六、於稚相備
ヲヲ右ニ艘ヲ相ヲク周ヲ廻ル玉ハ半鐘形ニ而ヲ同百行
ル而ニ於行迄看ヲ味方ハ一番ノ大炮ヲ即死ス人計ヲ負四五人
ル合ハ味方勝利能得残念ニ立ル候味方即死
位ノ美戦即死三百五四人ヲ負ヒ多ヲ有ヲ様子ニ見ユル
九日ハ休戦ニ而和睦談ニ付長府ノ家老二頭ノ出張ノ義ヲ
家山口ノ窺甲ヲ双方白旗ヲ合印ヲ以ヲ
ヲ追ヲ地雷火ヲ発ス高田ヲ始メ
兼テ御通ヲ上陸ヲ上美人上陸ヲ等
和ヲ取ヲ結ハ而文ヲ品三百文ヲ等ヲ
七人又ハ十人宛ヒ連ヒ大ヲ振ヲ元ヲ自ヲ

以実以来ヲ以テ御上ヲ称シ奉ル等ノ儀ハ
以ての外ノ事ニ候
此ノ上方面ハ勿論ノ乱ヲ以テ奏当国征罰ト
シテ数多ノ大名ノ下向ト唱ヒ
義ノ州杯国中陣ニ相加ヘ候ハヽ
其ノ節ハ
右等ノ内意ヲ含ミ
其ノ節ハ
前件ノ人数ヲ大炮不残屋形ノ義ニ
以ノ外大名ニ内々大金ヲ頼ヲ以当海岸墓
一度ニ襲撃様ノ企ヲ以テ
万一
逃ル者ハ
勿論ノ通リ
以上
追テ
陣手伝老人ヲ供ニ有使者
又説ニ
敵ニ御座候
致ス
宜敷
御上ヲ
一ニ
二ニ
三ニ
四ニ
五ニ
六ニ
七ニ
八ニ
九ニ
十ニ
十一ニ
十二ニ
十三ニ
十四ニ
十五ニ
十六ニ
十七ニ
十八ニ
十九ニ
二十ニ
廿一ニ
廿二ニ
廿三ニ
廿四ニ
廿五ニ
廿六ニ
廿七ニ
廿八ニ
廿九ニ
三十ニ
卅一ニ
卅二ニ
卅三ニ
卅四ニ
卅五ニ
卅六ニ
卅七ニ
卅八ニ
卅九ニ
四十ニ
四十一ニ
四十二ニ
四十三ニ
四十四ニ
四十五ニ
四十六ニ
四十七ニ
四十八ニ
四十九ニ
五十ニ
五十一ニ
五十二ニ
五十三ニ
五十四ニ
五十五ニ
五十六ニ
五十七ニ
五十八ニ
五十九ニ
六十ニ
六十一ニ
六十二ニ
六十三ニ
六十四ニ
六十五ニ
六十六ニ
六十七ニ
六十八ニ
六十九ニ
七十ニ

○大炊殿ト相ヒ八月廿八日ヲ以テ大坂ヲ
於鞍加田浦ヘ向ケ帆ヲ張ル
○長州家ヨリ我国ヘ取計ヒ
八月十三日順動丸勝安房ヲ
永能治ヘ
再書附等ハ

但安房ヲ指シ進ム兵ヲ直ニ京師ニ向ケ
多和宇

一八月朔日夕英船弐艘来泊会ス艘
一日二回十二艘来ル英人当三回人通行ス
事行服部長門守松平奈川守行向石忠大夫係ニ而書簡ヲ
一同三日弐艘来ル而ハ船合拾七艘ニ相成ル
一同四日四ツ時分ヨリ頃当時出帆下ル関方ヘ行同刻仕懸ケ英方ヨリ英船
艘多ク先船ヲ又追懸ケ並ビ彼方ヨリ
一昨夕後ヨリ炮声当ニ相ヲ七ツ時分ヨリ近ク
一六日早朝ヨリ砲声相始夕刻近相ヲ申ル
一九日英子船ヲ艘当湊近ク泊其節ヲ通知ル

一十日夜ノ時分英船英佛都合四艘下ヨリ関ヲ押突キ通ル
付暫時見合英船ヨリ（本）一挺ニ手ヨリ得ヲ英船ヨリ
炮ニテ一ニ墨烟焼船時ニ火薬庫ニ火移ル夜四ツ時分近焼ケ数炮ハ其ノ
時分近夜四ツ時英人上陸台場大砲火門ヲ打折初長州家ノ条ハ
台場数ヲ悉ク逃去ル通船ヨリ検申ニヨリ大砲ヲ数箱計ヲ積ミ
ル多ク雑什荷直ニ及発砲ハ此申ル

一十一日四番台場　刻ハ時分ヨリ仏蘭英ノ砲艦ノ英佛
蘭三ケ国人数千五百人上陸台場四ツ所ヲ夜四ツ時ヨリ此放火火薬庫皆焼失
ル小院ヨリ陸戦着ハ時近山ヲ後ロニ布之ハ陣所船ヲ之ボンヘンニ焼
失戦中和蘭ハッテーラヨリ彼方長州ヘ英人乗組ヲ以製造

六ツ時近美船一回引返

一 七日八日堂場大砲ヲ船ヲ以テ運送ス 十日昼九ツ時ヲ
長州船人小船ニ而英艦ヲ来請和ヲ船ヲ以テ運送ス 十日昼時ヲ近
當ニ白旗ヲ立ル明後十日昼時ヲ近英軍艦ヲ以テ長州ヲ
第ト約定ニテ戦争見合相成ル方相当ヲ先刻ヲ以テ申ス
右ヲ通ヲ書面ヲ以テ申ス所ヲ以テ返書未ダ不仕ニシテ
兎ヲ近ヲ以テ戦合ヲ行不申候ヲ以テ且石炭積ル船
トル代ヲ船ヲ遣ヲ不申テ八手負ヲ死人ヲ引取ル為ニ
ヲ當時ヲ船ヲ以テ差ヲ遣ヲ引取ヲ返差ヲ

一 十日四ツ時米子船並氣ヲ赤間関ヲ
石ヲ津和野高船ヲ去ル四日ヲ下ヲ関着ヲ
當所着岸ヲ調ヲ来ヲ去ル十日ヲ砲戦ヲ或被ヲ沈ヲ
四ヲ浦別船ヲ奥ヲ陸申又一艘ヲ明ヲ来ヲ見ヲ得ヲ
了ヲ出ヲ別ニ美船ヲ被ヲ而暗礁ニ乗ヲ上ヲ
卸不申旦八日美船数被ヲテ引卸ヲ故其間ヲ砲戦有ヲ
ヲ共津和野船通行ヲ陸申出ヲ
陸四ヲ浦ヲ来ヲ数被ヲ長ヲ臺場前ヲ来ヲ
小倉藩伝聞ヲ
ヲ美船大艘ヲ遠方ヲ
サヽハ打前ヲ横子旦ヲ二日ヲ両人
追ヲ臺場ヲ打山ヲ
窮相成ル院ヲ

ニ参船ヲ申付右帆右ヲ後ニ従行候申候ニ付帆未ノ刻関ニ着
着暗碓ニ乗リ上ケ多船ニ船ヲ引卸シ候様子見ヲ候申ル
一 今夕佐賀ヨリ参船ヲ艘来着南ニ碇泊
一 十日昨日来泊ニ参船今朝五ツ時分ニ帆未ノ関ニ着
一 当為ニ船下ニ関ノ浦ニ御着候ニ付ニ艘ニ船ヲ不遣砲発艘ニテ寺墓石数艘泥土ヲ敷ニ一向難儀
ニ候引揚後ニ山陣取墓場通ニ地雷火数ヲ不敷兵上陸遇ニ地雷大
ニ発ニ付ニ船ヲ斬ニ砲発ニ付ニ夜中ニ船ヲ斬ニ砲発ニ付ニ
大ニ発ニ傷仕且経ニ兵ニテ船経数
一 同七日美人浜ニ砲ニテ上陸ニ長州勢大得勝利ニ付ニ子松ヲ墓
場ニ将某勇気ニ人ニテ檀ニ浦ニ向撃打候ニ同八日ニ子松墓場
ニ参船四艘来巌流島ニ方ニ回ル打ニテ仕ニ仕ニ得ヲ吹ニ態ニ
引揚ル艘ニ人ニ乗ニ方ニ故後ニ墓場ニ上ル大砲ニ二ツ陣屋ニ
焼大ニ家ニ申刀ニ其後ニ去ニ右両品ニ家焼同九日美船ニ
艘御ニ方ニ通見廻引返ニ申ル同十日北船ニ三ツ引出帆引候ニ
船門司ニ方ニ参船ニ艘ニ方ニ引上ケ傾ケニテ作事仕ニ浦
方モ八艘ニ方ニ何ニ様ニ作事完申ニ艘大破ニ付不行候ニ出来ニ
子ニ艘ニ家ニ申ニ参ニ夜数船ニ隻ニ引卸ニ様子申ニ
一 十二日細川侯ニ内渡辺順ニ物ニ乗ニ在ニ家ニ前ニ後人ニ七日長州ニ山ニ陣船
ニ方ニ厚ニ接待ニ有ニ旦追ニ郡代急ニ用ニ
ニ参ニ報ニ申ニ出ニ知ニ遅ニ長ニ
夜廿ニ舟来ル止宿明三十日ニ迄待ニ
様ニ付ニ発ニ不遂ニ雨ニ引ニ

墓場ニ引保引退ク頃ニ至ル人上陸ノ砲兵隊并砲台ノ夷人大ニ狼狽シ遠方ヨリ
砲發長州炮丸達筈ノ処多クハ百数十発長州ニ四十発位夷船遠方
故ニ皆一向中リ不申長州死傷甚シカラス引
上ケル林夷人多勢上陸仕地雷發シ一人夷人
或ハ九十九申長州直ニ鉄砲ヲ以夷人ニ流ス一發ニ敗走長州一人夷人
土ニ人モ當リ中ル夷人敗走ス節倒ル者多生有在ス返ス様ニ検田ト者持リ居兵法砲ニテ
申ス由或ハ生有ニ人モアリト云ヘ人ニ人ハ意ニ大砲ニテ夷船弐
弐人共ニ夷人生有ニ初長州ニ而ハ并討度ニ大砲ニテ夷船弐
艘左右ヨリ挟一旦潮汐込ニテ又汐乾中ニ船引上ケ長州人ニ大ニ感ス
又前田前原熊ニ夷大船ニ上ケ敗走ニ引ニ来帰ルト
申候

和長家筆録ニ滞ル因ニ傳船ハ遠ニ而成ル事夷人寄付ニテ及發
砲ニテ

一 同十二日黄昏夷船ニ破下ニ実ニ来ニ以上

一 同十三日夜ニ時ニ至ニ気船ニ破ス

一 同十四日未明ニ気船下ニ関方ニ趣

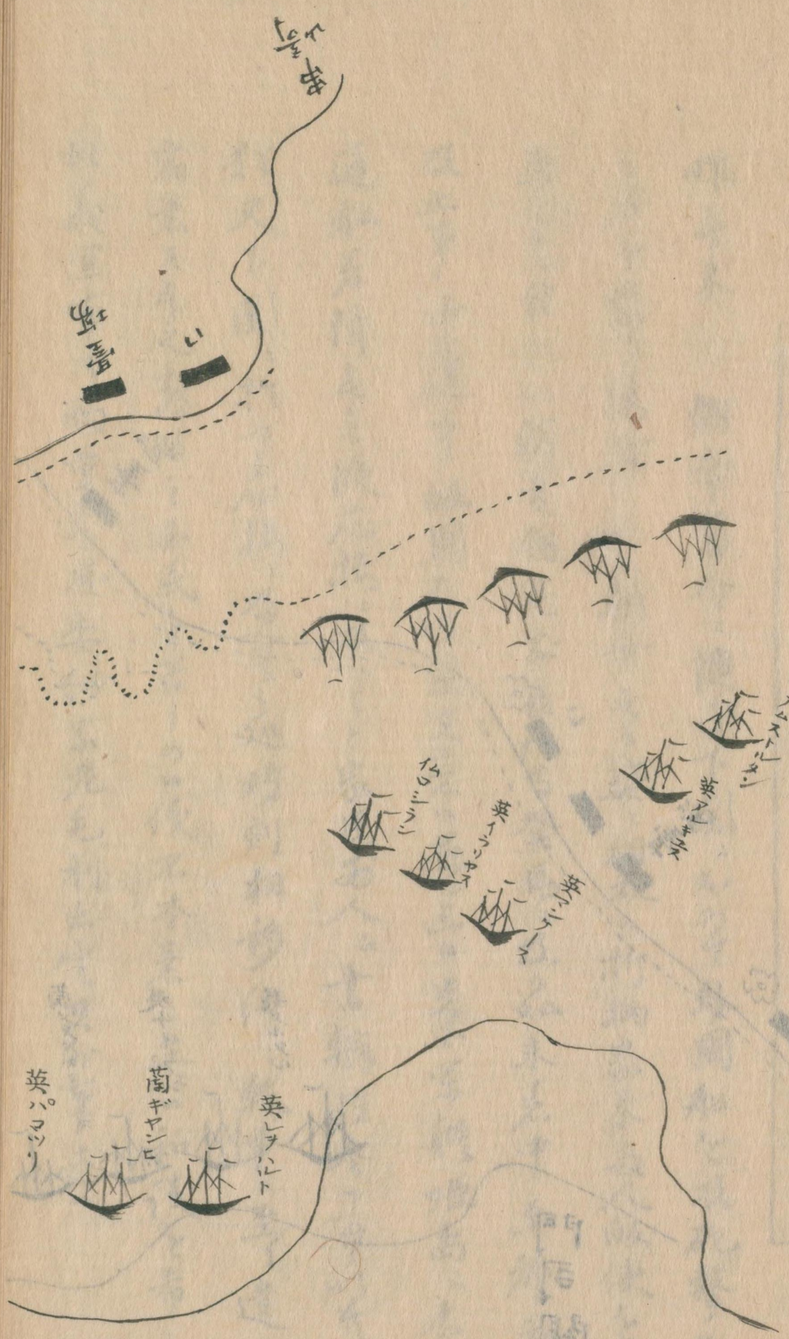
右傳聞ニ近ニテ虚實難ニ分ニ得ニ記置ニ後ニ正ス

子八月

松平中務大輔家来
姫嶋出役
宮部善三郎

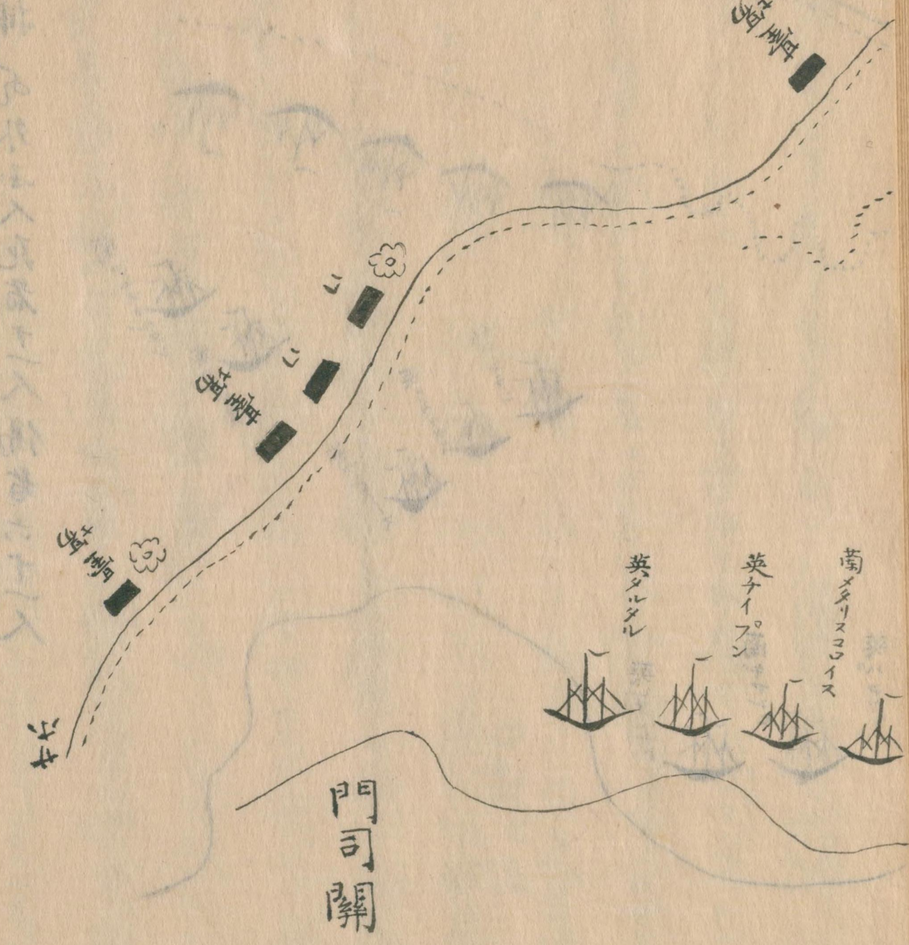
甲子除夜浪華ノ浦作法ノ里ニ有ル客舎燈ノ下ニ
年ノ内ノ事ニ思ヒ出ノ事ニ
ソヽ数字ニ書ニ集ル
作者野老

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用



元治元子八月廿二日三百之内姫島へ到着五日六日
程大砲六十一門捕ル外ニ人死者十一人傷者六十一人
戦争長引ニ而六百人

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用



呈合衆國水師提督

昨年来　朝令幕令ニ備ヘ下関ニおゐて外國船を及砲撃ニ処ス豈料暴発ノ名を蒙り遠背　朝命ニ乖ク姿ニ相成ル折柄家来数人飯使を以解説ニ趨ラシムルニ付　朝旨御寛容長門ニ発砲ニ及ビ未ダ京都変動ノ事情不及止事　中途ヨリ飯国ニ引取ル事ハ実ニ恐入候ニ付下関通船差障ニ及候ニ付家臣数人ニ書翰持参ニ付出帆後ニ付不取敢又下関ニ於テ応接ニ及ビ候処延時刻相移候ニ戦争ニ至ル遺憾之至ニ候ニ付　宸意ヲ奉戴シ数万ノ生民ヲ苦シメ候ハ本意ニ至ニ候和議ヲ希ニ候ニ付他事ハ左ニ述ル

此義宣布ノ為メ飯国家老毛利出雲守一ノ申述ル

元治元年八月九日

松平大膳大夫

イニ　松平大膳大夫　慶親

曲尺一寸一分落　サシ込シ

○長崎より小使右田源左エ門方江申来書翰

飯艦便拝啓仕候然ハ出帆之節ハ世話罷成候礼ハ十吉長州戦争五ツ立ちあとより

英人千五百人上陸ニ相成一番より五番迄ニ砦場石幾英人ニ旗を建先方悉く

敗して七日ニ英使者事ニ降参ニ即旗ハ白旗として白ニ旗持帰り四ツ日ニ大膳

父殿より書面持参ニて家老より右ニ付戦争止ニ相成則アトニテール大膳

父殿一面会ニ議定右ニ事ニ付英仏蘭ニ旗章を下関ニ立ル

○当午ノ夜英船ヘルセエス下関より帰ル旨所ニ戦争之有様をアールコック等

ニ報ズル　五日より戦を初八日ニ至りて長州より和を乞ひそれ下関辺ニ有之砦

場ハ悉く投ケ捨テ奪ヒ取ル砲数七十ツ余ニ及ブ

英死人八人　蘭仏　六人

傷を負者英四十八人　蘭仏　六人

手負士官

ユテイレスの船将　深手

ユテイレスのロイテナント　タルタル船のロイテナント　危シ

ユテイレスの士官　タルタル船の士官　深手

深手

一長州ニ空店書簡を数合衆ニ示シ抄掠ニ来ル意ニ驚ク意を示シ応接数刻を

費ヤス

長府ヲ書簡和文ヲ以テ仏人ヲ浮ラルヲ見ス軍艦四艘ハ下関ニ止ラト云説アリ

○下ノ関戦争新聞

内海ヲ英国軍艦ベルレユス」ノ者ト告ラ旅ラ通信ノ急等ヲ見テ左ノ如ク書ヲ認メ

「本年」即日本八月朔日」

英書ニ曰英国名帥提督「コライレス」船ニ九月朔日ノ夕刻豊後洋ニ着ク其地ニ於テ佛蘭西和隊ヲ上海ヨリ石炭和ヲ引率ヘル「ベルレユス」船ニ出会ヒ提督「ベルレユス」和ヲ伴ヒテ直ニ内海ニ進ミ昨二日午前集参府峰ニ砲ヲ発ス「ジヤムビイ」和ヲ量利堅蒸気和「メーキアン」ノ一連既ニ先ニ着シ居ル日夜ノ号ニ呑国結連ノ和隊ヲ以テ拒ム船ニ忙ク石炭ヲ積ムノミ

九月朔日曜日結連ノ和隊三隊ニ分レ英国提督中軍ニ将ル朝姫島ヲ発シテ下ノ関港口ニ着一英和ニ砲ヲ投ル其時ヨリ英国和隊ハ同国軍艦「コッケット」ノ長崎ヨリ来ルヲ以テ援勢ヲ加ル旅有様探索「コッケット」船ニ託シ蒸気ヲ寛ニシテ陸地ニ沿シ

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

諸砲臺の力と擁護〻次日屈嶺有〻き攻勢の法を定むるを數刻と移す

九月五日「月曜日」船々戰爭の支度に最多忙なり仍和蘭昇行を以て傳令と爲し躍に陸す

午時後二時錨を起すべき令岡を發〻和を忍ち列を整へたり即

重隊　和將「ヘイス」之に乘る

「タルタル」「テユブリクス」「メタールコロイス」「バラサジヤムビー」「コラハルト」各船号

輕隊　和將「キングストル」之に乘る

「ベルシユース」「メテユサ」「タンクレード」「コツケット」「ボンスユル」各船号

重隊ハ「マイダムラ」ヨリ臺場の正面千六百ヤルドの距離南方に備し輕隊を長府臺の砲臺ヨリ奪ひ「マイダムラ」並サホの臺場と擊攻ん爲陸に搘〻て北方に備ふる砲と爭すべし

午後四時に和兵皆位置を定めたりと日本人砲と發せさりし提督の和ふ歌と擊つべき令岡

乃ち右ヶ船彼砲より猛烈なる一彈と四千三百ヤルドの距離なるマイダムラの臺場に打込んと

此に於て日本人忽ち相応一般の戰爭を始めり

重隊を擧に其彈丸の功と定めて發砲す輕隊ハ縱橫に往來して長府臺の砲臺と援助〻橫射を加へ〻りて灌きかけ五時に二ニレヨート前に至て諸砲臺默然たる時

「ベルシユース」船少〻く後れて「メデユサ」船陸に沿ひマイダムラの臺場に靜に進むと見るや和兵の歸〻を祝迎したり

船將「キングストレ」及「ロイテナント」「ヒット」同「フロード」並砲手「コックレイン」二十人の一手と共に上陸〻茂林中に備へ〻銃隊に向て發い砲の火門に釘を打〻十四門の砲を廢物となすを得たり其動

「ヤメデユサ」船に向て手傳よく助けよんぬ

翌六日「火曜日」午前五時半「ジヤホ」の臺場より「タルタルテ」「コブリクス」船の輕隊の部中上陸せんき隊伍を戴くる小舟を拖き進ミ「コロヂルスユールラマン」並「コンロル」船の水兵隊と直に上陸〻て其一砲の防禦の下に列を整へ〻ん右人ニ忽ち進んで「コシネジレット」

並ヒリユロル」ハ忽チマイダムラノ砲臺ヲ驅ケ下シ次時午前十時ありしろ「ベルエユス」ハ其船ト
陸地ニ向ヒセシヨ湖潮ニセラレ船底擱淺(一擱淺)セリ然レドモ「ヤールド」ノ距離ある為
ニ上陸セシ隊伍ヲ防守シ又備ノ者ヲ集スルヨ大雷ありしとそ午時半日ノ乃大ニ小我ありて
多字隊ハマイタムラヨリサホノ臺場ニ向テ進ケル臺場ヲ奪(進ミ右臺場ヲ奪ヒ)マイタムラノ後備トシテ狹路ニ大砲ヲ備ヘラレ木立ヲシテ
指揮スル所ニ因ヒ戰爭ニ於テ小銃ノ彈足ヲ要キ(キ)ヲ先ヲ争ヒ抗拒(先ヲ争ヒ抗拒)セシヨリ
暫時後セシヨリ後ニ支砲臺ヲ移シ大砲ヲ和中ニ運ンタリ午時半日ノ乃大砲數ヲ発
シ船隊ノ小舟ヲ以テ和中ニ運ヒ納ラン其内(發砲ハ日本製ノ重サセトン移ス積
砲あり)又「ベリユス」和浅瀬ヨリ引出サンヨヨ術ヲ施シ為ニ遂ニ能ハス
午九月廿七日「タルタル」「テユフリクス」「メタール吉サス」等引「ヤムヒー」船ハ瀬戸ヘ參テ進ミ勢時ヨ
キ立為ニ向ルキフレノ砲臺ヨリ其夜ハ「ベルシユス」船ヲ「ハラサニアルゴス」船ノ
助ケヲ以テ第上ケシ瀬ヲ新ルヲヨトセラル
九月廿日和睦ノ旅ヲ陸ヨ揚ケ和ヲ告ケシヲ以テ今ハ既ニ砲ヲ撤スヘキ業ありて大砲
類ハ大方結連隊ノ各和ニ向ヒ其時ヲ為テ長州ヲ惡話(談)セント子ヲ請ケ九月九(カ)日ヨリ軽隊
砲ヲ記シテ以テ陸地ニ進ムヲ而シテ和ヨリ「キングスストン」ヨリ「チユフートラウイン」ハ臺場ニ備ヘシ砲磯(磯)ヲ
隊上陸シ「チユフートラウイン」ハ臺場ニ備ヘシ砲磯ヲ奪(獲)ヒ各和ニ運(運)ヒ
奪ヒ砲數

長府藩ノ臺場ヨリ　四門
マイタムラ　二十六門
ラウイン　一門
サホ　十五門
キブレ　十五門
本土臺場　七門
通計七十門

英　八人　死亡
仏　四人　英ニ死傷合五十六人
蘭
英　四十八人　負傷
佛　六人
蘭
仏蘭合死傷十人

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

手足士官

ユライレス 和将 アレキサンドル 澤多

ユライレス ロイテナント卫ドワルト 澤多

ユライレス フトキンソン 澤多

別ニ書籍ノ抜萃ス

千八百六十四年 元治元年 九月十二日下ノ関沖ニ於テ

諸連合ノ和蘭（八月）南月罗日曜日」姫島ヨリ発シ下ノ関ニ於テ

堡臺破砕ノ壮観ヲ徇檣ノ上ヨリ望ム所ニ砲ヲ備フル

こと五ニ和ニ四百八尋陽ヲ（通）ヘ午五ツ（時）半曜日」ヲ以テ

フリリス、ダールユセイス」和（午）後ニ時ニ漸ニ通過ス

也トモ発スルヲ得ス」和ノ通ルヲ見ルヤ仏（即）和ニ発シ入ル

「ユライレス」和ヨリ放ツ十「ニユート」ヲ以テ「キユール（コフル）」破裂弾ヲ以テ

佛蘭西提督ハ臺場ヨリ射放ス破裂弾ヲ擒ヒ幸ヒテ再ヒ臺場ノ前ヨリ

実ニ於テ長州地方ノ一里ノ方一面大敵ヲ始ムルヲ以テ

「セシラシエス」及ヒ「ユライレス」ノ中ヨリ砲発セリ元来ハ遅延和ノ

失リヲ和隊ヲ警ス為ニ三十ポレトノ弓ヨリトライフル」砲ヲ放ちう」午後五時半ニ至テ

日本人ノ発砲衝ニ当ル「ユライレス」ノ一ハ和隊ニ発砲セリ

タンクレード」和臺場ニ近接シテ陸ヲ上陸セシメン砲ニ火ヲ点シテ臺場ヲ攻ムルヲ

以テ発リニ砲ヲ点ス時ヲ同テ中央原野ノ叢林ヲ指シテ日本人小隊（出セリ）

ヲ以テ景（ソ）ニ進ムヲ見ル敵ヲ見ル（ヘ）ニ発シ一人ヲ仆（低キ処ノ）

臺場ヨリ招キ呼ヒ子日本人ヲ駆ケ入ラシム午後六時ヨリ翌

ル日本人ノ本土（エ）ノ臺場迫近迫信シ又ヨリ日本人踏ミ入ル四門ノホウイッツル砲ヲ以テ我

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

たり此時和将「アレキサンドル」ハ足を傷めり又十人餘死し二十三人の手傷を負しかと
終に火門より打ち入る佛人曰く我まさに此事行はれざるを恐れ砲を出さゞる再び門を
ひらかんと其門を堅く鎖して和中に伺う阿蘭仏(脚)和一隻
損一阿蘭人を載て七ノットの名艦に逃げんとす此所より
ちかき小島に日本人一人を捕へり此島の朝も和の二臣(通)用事の為「ユライレス」に私る該
きしう艘にして二人曰私隊通ふんとなり此島の南北にあり是亦小島のみなり
ついうちなりと提督答曰余汝を殺さんとす」其八日午後二時英
和に赴きしあん「ユライレス」和より赴きたり砲を足下まで止まると雖も和暁の旗と
揚発放止をうず其あん曰其君ハおのれ人手を殺の和睦(談)ハ何のおのるありとも拒むるなく
又長臣土曜日昼午より和より赴きしとなり
同月十五土曜日十二時二十分「ニュート」前右長臣その総書籍とれ英利堡軍の指揮
に委めり(余足下の著述に係ん)と其写一と封送す)且餐等を喝羅を与く大君に
送り意報の成あって戦のうを止ず討滅なるを恐れ
何となれハ長崎ハ港の大なるに其民を平穏ある地に移すべき権者を授るため
戦を起すと通知せざりしなり
「メジユサ」ハ鉄鎖を以て其和を護へ巧に戦うて
最後に至り四十ポンドの砲十七門を備へたる
「コルモラント」(後)私十一日午後六時ニ上陸より
此所気候ハ午前七十度午後七十四度なるり
港を名に南買の為屋く此地元三方殺の由私大抵ハ日毎に通ふ地を最要なり
「ベルレユス」船ハ公使をさして出帆せり
長崎の大君と話し吟味を見るべし

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

仰各藩ヲ会シ諮詢セラレシヤ
和国ヲ挙テ日本ノ人心ヲ定メヨ
和親ヲ関テ大君ノ権ヲ私セス
其ノ郷ニ帰隔ノ一部ハ其地ニ於テ之ヲ拠ス
長門ヨリ出セル書翰ノ写

米利堅ノ提督ヘ謹白ス

日本帝ノ命ト大君ノ命ト異ナリ　帝ノ命ヲ奉シ下ノ関ニ於テ外国船ニ発砲シ及戦ノ名ヲ招ケル余　帝命ニ反シ処置スル如ク見ヘメルニヨリ我ニ告諭シ其処業ヲ継ノ可カラサル為外国ノ一ノ使者来ル此故ニ長門守若殺ヘシ帝ノ志ヲ聞カ為京都ニ向フテ発馬セリ未着以前京師ニ騒動起リ貴国ノ軍艦堀鳥ニ来着ノ不得止其使ヲ不遂シテ去レリ去ル三日書ヲ載スル使者ヲ送ル曰ク足下瀬戸ヲ通行スルヲ禁ス使者ノ途中ニテ足下ニ追付ヘシト思ヘルニ此ノ如キ不都合ノ生セシハ余ニ於テ遺憾ニ戦ハ萬民ノ大害ナレハ和睦ヲ請ヨリ外他ナシコレヲ能ク推量アレカシ委細ノ儀ハモ利出雲其外ヨリ足下ニ陣述ス可シ

元治元年八月九日
則第九月九日ニ

松平大膳大夫

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

○有司中勢力輔佐ノ者ヲ召ス書面

去ル十二月石巻ノ役人ヨリ外国船渡来ノ節取計方ニ付伺ノ趣ニ英船前年上陸通弁ノ者ヨリ右英船通辺ノ一西浦ト申ス四五丁程往キ孔版ニ有業ヲ示シ聊カ物品ヲ与ヘ候ノミニテ帰帆ノ筈ニ候ヘ共一枚捨ヲ以テ右ノ者ヲ召ス書面

訳上陸ノ者ハ高中基ト申ス一書ヲ以テ陸ニ於テ村役人ヲ合ス聖ヲ上陸ノ訳ヲ回答ノ旨ヲ以テ私ノ地ト申ス地方ノ小舟ニ乗人共ヲ高セ海岸ヲ沖ニ碇泊ノ山ニ於テ船ヲ改メ近方ニ於テ面側ニ一同所ニ上陸ノ件ハ其ノ中諸方ノ御分竹田津浦ト申ス海岸附測量ニ上陸ノ旨ヲ以テ和語ト申ス書ヲ以テ乗人共ヲ通辺ノ役人ニ差出ス中ニ任セ請取置右ヲ通村ノ上陸ノ訳ヲ以テ帰帆ノ筈ニ候ヘ共一枚捨ヲ以テ右ノ者ヲ召ス書面

訳上陸ノ者ハ高中基ト申ス一書ヲ以テ陸ニ於テ村役人ヲ合ス聖ヲ上陸ノ訳ヲ回答ノ旨ヲ以テ私ノ地ト申ス地方ノ小舟ニ乗人共ヲ高セ海岸ヲ沖ニ碇泊ノ山ニ於テ船ヲ改メ近方ニ於テ面側ニ一同所ニ上陸ノ件ハ其ノ中諸方ノ御分竹田津浦ト申ス海岸附測量ニ上陸ノ旨ヲ以テ和語ト申ス書ヲ以テ乗人共ヲ通辺ノ役人ニ差出ス中ニ任セ請取置右ヲ通村ノ上陸ノ訳ヲ以テ帰帆ノ筈ニ候ヘ共一枚捨ヲ以テ右ノ者ヲ召ス書面

役人ニ差出ス中ニ且日附ノ書添辺附ノ伊予郡代所ヨリ御用状等ヲ抱村役人ヲ柄ノ村役人ヲ合ス聖ヲ上陸ノ訳ヲ回答ノ旨ヲ以テ私ノ地ト申ス地方ノ小舟ニ乗人共ヲ高セ海岸ヲ沖ニ碇泊ノ山ニ於テ船ヲ改メ近方ニ於テ面側ニ一同所ニ上陸ノ件ハ其ノ中諸方ノ御分竹田津浦ト申ス海岸附測量ニ上陸ノ旨ヲ以テ和語ト申ス書ヲ以テ乗人共ヲ通辺ノ役人ニ差出ス中ニ任セ請取置右ヲ通村ノ上陸ノ訳ヲ以テ帰帆ノ筈ニ候ヘ共一枚捨ヲ以テ右ノ者ヲ召ス書面

役人ニ差出ス中ニ且日附ノ書添辺附ノ伊予郡代所ヨリ御用状等ヲ抱村役人ヲ柄ノ村役人ヲ合ス聖ヲ上陸ノ訳ヲ回答ノ旨ヲ以テ私ノ地ト申ス地方ノ小舟ニ乗人共ヲ高セ海岸ヲ沖ニ碇泊ノ山ニ於テ船ヲ改メ近方ニ於テ面側ニ一同所ニ上陸ノ件ハ其ノ中諸方ノ御分竹田津浦ト申ス海岸附測量ニ上陸ノ旨ヲ以テ和語ト申ス書ヲ以テ乗人共ヲ通辺ノ役人ニ差出ス中ニ任セ請取置右ヲ通村ノ上陸ノ訳ヲ以テ帰帆ノ筈ニ候ヘ共一枚捨ヲ以テ右ノ者ヲ召ス書面

役人ニ差出ス中ニ且日附ノ書添辺附ノ伊予郡代所ヨリ御用状等ヲ抱村役人ヲ柄ノ村役人ヲ合ス聖ヲ上陸ノ訳ヲ回答ノ旨ヲ以テ私ノ地ト申ス地方ノ小舟ニ乗人共ヲ高セ海岸ヲ沖ニ碇泊ノ山ニ於テ船ヲ改メ近方ニ於テ面側ニ一同所ニ上陸ノ件ハ其ノ中諸方ノ御分竹田津浦ト申ス海岸附測量ニ上陸ノ旨ヲ以テ和語ト申ス書ヲ以テ乗人共ヲ通辺ノ役人ニ差出ス中ニ任セ請取置右ヲ通村ノ上陸ノ訳ヲ以テ帰帆ノ筈ニ候ヘ共一枚捨ヲ以テ右ノ者ヲ召ス書面

役人ニ差出ス中ニ且日附ノ書添辺附ノ伊予郡代所ヨリ御用状等ヲ抱村役人ヲ柄ノ村役人ヲ合ス聖ヲ上陸ノ訳ヲ回答ノ旨ヲ以テ私ノ地ト申ス地方ノ小舟ニ乗人共ヲ高セ海岸ヲ沖ニ碇泊ノ山ニ於テ船ヲ改メ近方ニ於テ面側ニ一同所ニ上陸ノ件ハ其ノ中諸方ノ御分竹田津浦ト申ス海岸附測量ニ上陸ノ旨ヲ以テ和語ト申ス書ヲ以テ乗人共ヲ通辺ノ役人ニ差出ス中ニ任セ請取置右ヲ通村ノ上陸ノ訳ヲ以テ帰帆ノ筈ニ候ヘ共一枚捨ヲ以テ右ノ者ヲ召ス書面

役人ニ差出ス中ニ且日附ノ書添辺附ノ伊予郡代所ヨリ御用状等ヲ抱村役人ヲ柄ノ村役人ヲ合ス聖ヲ上陸ノ訳ヲ回答ノ旨ヲ以テ私ノ地ト申ス地方ノ小舟ニ乗人共ヲ高セ海岸ヲ沖ニ碇泊ノ山ニ於テ船ヲ改メ近方ニ於テ面側ニ一同所ニ上陸ノ件ハ其ノ中諸方ノ御分竹田津浦ト申ス海岸附測量ニ上陸ノ旨ヲ以テ和語ト申ス書ヲ以テ乗人共ヲ通辺ノ役人ニ差出ス中ニ任セ請取置右ヲ通村ノ上陸ノ訳ヲ以テ帰帆ノ筈ニ候ヘ共一枚捨ヲ以テ右ノ者ヲ召ス書面

役人ニ差出ス中ニ且日附ノ書添辺附ノ伊予郡代所ヨリ御用状等ヲ抱村役人ヲ柄ノ村役人ヲ合ス聖ヲ上陸ノ訳ヲ回答ノ旨ヲ以テ私ノ地ト申ス地方ノ小舟ニ乗人共ヲ高セ海岸ヲ沖ニ碇泊ノ山ニ於テ船ヲ改メ近方ニ於テ面側ニ一同所ニ上陸ノ件ハ其ノ中諸方ノ御分竹田津浦ト申ス海岸附測量ニ上陸ノ旨ヲ以テ和語ト申ス書ヲ以テ乗人共ヲ通辺ノ役人ニ差出ス中ニ任セ請取置右ヲ通村ノ上陸ノ訳ヲ以テ帰帆ノ筈ニ候ヘ共一枚捨ヲ以テ右ノ者ヲ召ス書面

役人ニ差出ス中ニ且日附ノ書添辺附ノ伊予郡代所ヨリ御用状等ヲ抱村役人ヲ柄ノ村役人ヲ合ス聖ヲ上陸ノ訳ヲ回答ノ旨ヲ以テ私ノ地ト申ス地方ノ小舟ニ乗人共ヲ高セ海岸ヲ沖ニ碇泊ノ山ニ於テ船ヲ改メ近方ニ於テ面側ニ一同所ニ上陸ノ件ハ其ノ中諸方ノ御分竹田津浦ト申ス海岸附測量ニ上陸ノ旨ヲ以テ和語ト申ス書ヲ以テ乗人共ヲ通辺ノ役人ニ差出ス中ニ任セ請取置右ヲ通村ノ上陸ノ訳ヲ以テ帰帆ノ筈ニ候ヘ共一枚捨ヲ以テ右ノ者ヲ召ス書面

役人ニ差出ス中ニ且日附ノ書添辺附ノ伊予郡代所ヨリ御用状等ヲ抱村役人ヲ柄ノ村役人ヲ合ス聖ヲ上陸ノ訳ヲ回答ノ旨ヲ以テ私ノ地ト申ス地方ノ小舟ニ乗人共ヲ高セ海岸ヲ沖ニ碇泊ノ山ニ於テ船ヲ改メ近方ニ於テ面側ニ一同所ニ上陸ノ件ハ其ノ中諸方ノ御分竹田津浦ト申ス海岸附測量ニ上陸ノ旨ヲ以テ和語ト申ス書ヲ以テ乗人共ヲ通辺ノ役人ニ差出ス中ニ任セ請取置右ヲ通村ノ上陸ノ訳ヲ以テ帰帆ノ筈ニ候ヘ共一枚捨ヲ以テ右ノ者ヲ召ス書面

役人ニ差出ス中ニ且日附ノ書添辺附ノ伊予郡代所ヨリ御用状等ヲ抱村役人ヲ柄ノ村役人ヲ合ス聖ヲ上陸ノ訳ヲ回答ノ旨ヲ以テ私ノ地ト申ス地方ノ小舟ニ乗人共ヲ高セ海岸ヲ沖ニ碇泊ノ山ニ於テ船ヲ改メ近方ニ於テ面側ニ一同所ニ上陸ノ件ハ其ノ中諸方ノ御分竹田津浦ト申ス海岸附測量ニ上陸ノ旨ヲ以テ和語ト申ス書ヲ以テ乗人共ヲ通辺ノ役人ニ差出ス中ニ任セ請取置右ヲ通村ノ上陸ノ訳ヲ以テ帰帆ノ筈ニ候ヘ共一枚捨ヲ以テ右ノ者ヲ召ス書面

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

村田傳藏

ヲ載ル府右書類お添付仰ヲ乞ヲ

八月十六日

別紙

英人ヲ相送ル書

一夫レ天地初テ開ケテ萬国物産ノ名殊ナルヲ並ニ風俗ノ異ナルハ元ヨリ自然ノ理ナリ茲ナカラ西海ハ兄弟ナレハ懇信ヲ通シ交易ヲナシ互ニ其国民安樂ニナサシムル社天ノ意ニ叶ヘシ茲ニ旧記ヲ考レハ昔不昧ノ世ハ陽ニ交誼ヲ結ヒ陰ニ邪心ヲ醸シ一ハ其邦国ヲ奪テ我欲ヲ恣ニセンカタメニセリ然ルニ後世漸ク悟リ後人漸ク開ケ方今西洋ノ如キハ全ク右様ノ邪心ヲ泯滅シテ誠意ナリ懇ニヲ通シ我ニ欠ル物産或ハ人造ノ器什ヲ我有余ノ品料ト代ヘ所謂有無ヲ通シテ国用ヲ助ルモノナリ故ニ政羅巴諸邦ヲ使節ヲ差越セシハ日本ノ主地ヲ奪フノ意ニモ非ス唯永代和親ヲナシ交易ノ規則ヲ不乱ヤウ條約取結ヒ為ト知ルヘシ初メ條約取結セシ時ハ日本政府ニ於テモ談論アリテ決定セシヲナレハコソ其信符ヲ附シ之ヲ世ニ公ニセシヲナラン左スレハ仮初ナラス又重大ノ事件ニシテ双方共意ヲ不忘失信アルマシキヲヤ我カ勢カヲ以テ之ヲ責ルヲ元ヨリ理ノ当然名義正面ナリ政羅巴諸邦ノ中間和合シ其大ノ事件ニ於テハ大君ノ意ナルヤ又ハ政官ノ意ナルヤ五ヶ年以来失信ノ廉不少真実ノ情ハ聊カ之ヒナリ條約面ニ背クナラス近頃横濱在留ノ政羅巴人不残引取ヘシ如ク左モナリハ物騒人命ニ至迄危難ノ切ニ臨マンモ難計吉故全権ニ沙汰アリ又長門ノ大名ノ如キハ既ニ言語ノ所業顕レタリ其領分下ノ関ノ海峡ハ洋船通航勝手次第ノ條約アル故国旗ヲ揚ケ通シタル洋船ヘ無二砲発セリモシ政羅巴ニテ右様ノ悪業ナシタルモノアルキハ速ニ之ヲ糺討シ懲悪ノ情ヲ附スルヲ必定タリ左レハ日本ハ来タ開ケス萬国ノ交誼ヲ知ラサレハ吾意ヲ寄メ程ヨリ取扱ヒ置ケハ或ハ我国勢ノ弱キカト思フモノアルヘシ左レト物ニ耐ユルモ大ニ境ノアルモノニテ国威ヲ賤メラレ権勢ヲ汚

ニ唯黙止スルハ大ナル恥ナリ外国政府モ今ハ殆ンド堪忍ノ緒ヲ断カントス今日本政府少ク茲ニ見ル所アルヲハ條約面ヲ重ンシ且信ヲ守リ横濱鎖関ノ議論ヲ止メ猶在留人ノ物財人命ノ危殆ニ及ヌル様之ヲ処シ下ノ関海峡自由ニ通航致シテ最早ノ無名ノ乱妨ナノ諺拠ヲ送ルヘシ若シ左ナキ時ハ各国全権連ニテ海陸都合ニ令シ我勢ヲ以テ條約再定セントス若此異変アルキハ続テ空恐ラク今迄ノ国ノ権威ヲ足下ニ掛ケン輩ノ頂上危カラント思ヘリ外国人ハ勿論日本大君名条約ヲ抱ルヤ否ヤ或ハ皇帝意ニ任スヤ或ハ大名ノ衆論ニ害ルヤ敢テ知ル処ニ非ス唯日本ノ勢ヲ以テ決シテヲ待政衆色諸ニ於テハ一旦取極タル条約経ヲ仍ホノコアリテモ之ヲ変スルコトナシ今云所ハ日本方今ノ勢ト政器已ノ真実トヲ併セ論セリ全権ハ条約ヲ極ヲ見改ルノ任ニテ外国政府ト日本大名ノ窓信ヲ成サシメン意アリ故ニ改革已改ニノ接様ヲ日本ノ柱トモ云フヘキ大名ニ知ラシメ自ラヲ国々ノ利益ナルヘキヲ撰ニ富ル強ノ基ヲ開クヨウイメサンニハ甚ク戦ヲ務ムト云ヘカラス、

○大秘編

一長州之方ヨリ京都一乱ニ付　天子ヲ擁シテ四方ヲ令セラル第ル不行大ニ勢ヲ張ンテ府ヲ各国矢人向ニ付四ケ所臺場築カレ左之書面差出ス　○昨年已来　朝令幕令ニ違ヒ　既ニ録ス故ニ略ス

右書翰差出ス　翌十九日惣橋ヨリ右和談ニ依都ヲ改府長谷川喜六郎ヲ以テ取扱ヲ申ス由ニ付　○右一條長谷ヲ臣五人英学修行ニ英国ヲ遣ス人ヲ定ンカ為ニ長谷ヲ遣ス筈ニ付右二人ヲ遣シ且其ヲ以テ二小ヲ遣ス橋院ハ和親ヲ日本ヲ以テ外国ヲ親ヲ和親ヲ利害ヲ尽ス迄ヲ惣橋ハ右返差ハル　翌廿日ニ於英人領事ヲ談得ヲ以テ　吐二人夷人の形ヲ模様ニ彫ル有ル人ヲ英ヲ内ニ送ルヲ　然ル右返差ハル　翌廿日ニ於英人領事ヲ談得ヲ以テ

国ニテ長谷ヲ事ヲ決セラ三房ヲ横船ハ必死ヲ受シ　此ヲ出帆ハ　ハ等事ニ夷人ヲ以テ　此陽ハ者ヲ　ヲ領ヲ事ニ船ヲ連行ヲ　ハ

就テハ此ヲ列ヲ戦上陸ハ　ハ迫ニ攻ヲ　ヲ有ル和談ヲ　ハ惣橋ヲ公令ヲ中ニ付

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

揚いろ〳〵贈答を幕府が取立ケ渡し〳〵ニ長ケ丸ケ之ケ之ケ之

フナラ船箱鉄ヲ四ツ方ハ文徳ニテハ今ハ五百疋内
刀ト等ハ銭ハ一ツ方ハ大ニ高ク天下ニ諸物騰貴セシムルノミニ
テ有ル実ニ驚ク
ベシ
狂ヲヤセハ
ノモノヲ
ヲ
ヲ

星 合衆国水師提督
既ニ録セリ故ニ再ニ録ス

一今日ヨリ已後惣テ外国船馬関通行ニ苦ヲ要セス但シ薪水ヲ
一石炭食物薪水ヲ船中ノ用ニ品ノ寄渡ス事
一馬関ハ海湾ニ
一新規ニ
一馬関町ヲ

七月廿八日

一アメリカ 亜墨利加 ノキヤン 子朝五時ヲ
賀下田ノ
事ヲヲ四五ヲ陽テ
海ヲ

廿九日晴

陸ヲヲ運用ニ土佐沖ニ日夕陽ヲ傾ク

晦日晴

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

昼八ツ時仔豚ヲ須毋ニ碇ヲ卸シ時節ヲ探索測量シタル大地在茶ノ事

八月朔日　晴

昼四ツ時出帆九ツ時ヨリ蘭和シヨンヒ艇沿ヒ見ヲ出ス船ヲタヽク音艇ヲ牽ク
玉蜀鳴姫島ニ碇泊ス事

同二日　曇夕方大雲雨雷鳴

朝四ツ時ヨリ夜四ツ時迄ニ前日出帆ス軍艇未タ残来ラス事

同三日

軍艇ソロ〳〵ハツテイラ着シ島ヽ測量

同四日　晴

朝五ツ時仏軍艇ヲ陣ヲ下ノ関ニ向ヒ出ス

碇泊弘ノ英ヽ蒸気ヲ以テ曳揚ヲ距ル二

昼九ツ時ヨリ

下ノ関ニ向ヒ昼九ツ時仏トークレツス軍艇ヲ陣ヲ　共四艘行ク此四艘の軍ヲ
ヲニヽ曳揚ニ向合長州ノ砦砲ヲ発ス方半時斗リ見合ヲ其ヲハツテイラ請方見ル
砲声ノ内大砲ヲ発ヲ是ヲ始メ〳〵ヲ陣の四艘ヨリ都合ノユラリユス艇ヲ使者事ノ論議ヲ
ヲ陣

同五日　晴

下ノ関ニ向ヒ昼九ツ時仏トークレツス軍艇ヲ陣ヲ　共四艘行ク此四艘の軍ヲ
ヲニヽ曳揚ニ向合長州ノ砦砲ヲ発ス方半時斗リ見合ヲ其ヲハツテイラ請方見ル
砲声ノ内大砲ヲ発ヲ是ヲ始メ〳〵ヲ陣の四艘ヨリ都合ノユラリユス艇ヲ使者事ノ論議ヲ
ヲ陣

軍艇ヨリ英国都督アームル幸殿ノ書翰ヲ
其

同夜九ツ時近辺烟こと立昇り見ゆる事

同六日 晴

朝六時長おか砲発こと矢艘こと九砲発に艘さき多寡乃化登四時英仏兼子五百人程上陸こと豊場四ケ所こと築石行まて各おの旗を建四ケ所こと陣屋を構居民屋こと焼失候一夫々六ツ半時比山の蔭なる伏垂こと上陸四ケ所こと長おか方の砦おの四方の物こと戦争初こと所こと中こと矢人方かボンベこと手込こと右長おか方の備ありて一時こと敗軍こと人心不安容こお等沸騰こと致候こと上陸こと士卒こと内こと人戦死の者あこと屍豊前小倉候こと持ち浦詰こと役人こと組合こと上旧砦こと堀築注其砂役人こと長おか日比こと暴虐こと悪こと矢人方人用穀多こと品何ありて共こと百姓進方中哉五こと時こと比上陸こと士卒百余御陣屋まこと誘方こと砲煙立昇り消さること

同七日 晴

朝六ツ時士卒千五百人程上陸昼九ツ半時比仏艘か大ボンベこと山の後ろなる陣所こと建立昼八ツ時こと六日の戦争こと百倍こと人英仏軍艘こと連来こと南艘こと遮蔽こと揚る夜九ツ時こと近陣所こと妙蝶石絶琴六ツ時近こと上陸こと士卒百余御陣屋こと遠山こと頂こと四五人こと艘こと眺望の者こと遠鏡こと見こと百余こと一人こと長おか方こと者こと知こと

同八日 朝曇こと昼後小雨八時晴

朝六ツ時士卒千五百人程上陸長おか下の宮町こと宮近辺こと行大砲こと陣の仏軍両陣こと抗こと発砲昼九時長おかこと市役人こと人従者あこと人名乗こと小艘こと乗こと上陸こと士卒こと人数こと多寡こと知こと為こと小艘こと方こと引こと者こと呼各おの艘こと繋こと立こと艘大将こと一人こと乗こと小艘こと方こと近寄こと乗内同艘こと内こと一人こと行昼九ツ半時大艘こと中こと掲こと白の旗こと揚こと一人こと長おか陸こと上こと一人こと行こと一人こと長おか陸こと上こと一人こと行こと一人こと長おか陸こと上こと一人こと行

同日昼四ツ半時分より夕七ツ時迄に英仏葡三者上陸ゟ凡百拾二人弟船ゟ揚り来る長崎湾
場の大砲ハ昼九ツ時分より夕七ツ時迄に英仏ニ軍船ゟ八十挺ゟ後ゟ後ゟ後

一 英国破油中英人ら奥鳥野菜乳漬油所ゑを西南部町演築出ニ定置ニ付ラ外掛
ゑる費没石お米ら付心ら遠ラ抜ら所ら法ラ事一
子八月
一 廿度損ラ多ラ出ラ小流甘ら宇武巻抜ら形ラ
上ら抜も是迄お伴ラ通伴ラ更ラ動ラ面ラ小伴ラ多形ラ出ラ
ら法ら所ら書面ラ出ら抜ラ所中ら多ラ所ら法ら
右ラ通ら達ラ信出ら付ラ所法ラ
子八月十五号 内田源四郎
一 ウエンニート外一人下関海岸ラ千坪ら地所返ラ宇港ラ上備ラ
老話合本陣ら商人ラ相越ラ事一
同十七日 曇 昼後雷雨
夕七ツ時英国軍艦ら兵人ラ人揚ラ
同十八日 曇
朝五ツ時下関出船九ツ時伊豫ら屬鳴吾子蔦ヘ碇泊之事一
同十九日 曇
朝六ツ時出船多六ツ時播ら明石沖ら碇泊ラ事一
同廿日
朝六ツ時出帆志ら沖ラ日夕湯ニ頓ラ没ラ
同廿一日 晴
多六ツ時横濱ら湊船ラ
右ラ商人ウインリートの小使長時行ラ取出同人ト同道ラ長ラの方ラ見て
来りて籠書ラ奉ラ一書ラ
○ウインリートの説ラ
一 長ラ事ラ事行ラ感心ラ事一

一上陸の号子迎し不叶とて敗散せし故負し上陸の間と云れい中に不叶なり是を戦なれさる故なりトス云

一小倉の方より討れい迎し処度の功を不奏トいふ

一下の関通行さしりかき名国苦しむ有大挙せしと云と戦し是を人数多く無勢なり

一三股備の舩い世界寺一トス云舩し処舩の行時を十死一生之戦し是を人数多く無勢なり

世界寺一ヶ里退敗を兩ぶれい左いふとろ

一諸品下直に売ると云今い実まる有ら迷惑ならめ処義理を立ぶれてき品物サれい不売ルと云仕何共ニ辞ど云

森木立

一舩の備立より接戦い形悪む向ふ

伏ふとなんとも存き左右十町手隔て大砲打込見て行き何ら在と中の二行う内分手あり

長おろう伏の時き行側の戦き行側より実人(回)俱ニ打殺すと覚暗うキ左右長お敗せしとろ

防周

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

一　姫路近辺之臺場ハ砲発なく散乱之後分捕ハ大砲数臺捕之もの之

一　周防之方分帯ニ九ヶ所ニ而大砲を豊前ら齎(ヨリ)て入船す

右之ウインリートの説と実ニ符合なり

○筑前州侯達長州侯歎願書并大膳大夫ゟ去年申上ル別帋書四通勅達之儀吉川監物侍を以被仰付候右之書面勅達之儀を不苦ら兼ら国ら勤王之志厚き故ニ哉ニ付此節申上候已上

去年お願ら出ら而ら
北官野　肇

閣下近〳〵

九月十一日

去月十八日之夜私家来脱走之もの罷出及騒擾候旨届出候不奉悼　脱走之者共為鎮撫国司信濃并毛利筑後守再出之節一ノ位之者ゟ和泉之儀ニ付御尋ニ而私并同氏長門守宿志を承通自己之及騒擾候旨且又右三人之者共家名利済路

九月十一日

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

守ル先鋒軍ハ此餘ノ何レヲ什ニ成下ニ於テ父子不仔
父ト八百ノ兵ヲ示ス不行届故ニ父ヲ殺ニ至リ本意ニ依
テ父子ヲ於関元怪ニ兵ヲ付何ヲ御用ハ
ヤリヲ

今私家来ニ名ノ人英私ニ為組横濱ニ於テ
臣子ニ分ル時ニ難測ヲ
仕奉ル上京皆ヲ和 御用ハ
おゐて第一仕歩被仰付候時能ク
七月廿二日

當月四日英佛米蘭諸軍艦十八艘私領内長門國赤間關ニ
数多豊家地ニ数百ノ私兵ヲ
輩下浪士ヲ二隊ニ分ケ相待ツ於大坂ニ達ス
、肯下ヌ之ト八百ノ兵ヲ示ス不行届故ニ父ヲ殺ニ至リ本意ニ依テ父子ヲ於関元怪ニ兵ヲ付何ヲ御用ハ

右書附之義九月八日之夜

○

告衆國水師提督

昨年来
朝命幕令ニ隨ヒ於下関外國船及砲撃之処實ニ容易ニ
非ス
朝命ヲ奉シ姿ニ相成リ折柄家来ヲ人ヲ以使ヲ以解諭ヲ請方ニ不得止事途
中ヨリ引返不行果其意ヲ過日書面國軍艦姫島ニ来リヲ由ヲ以下関通行差障リ之
旨輪申付ヲ得ヲ陸出帆後ヲ以文於下関
ヲ彼一可及應接ト家来ヲ人ニ書輪申付ヲ得ヲ陸出帆後ヲ以文於下関
可及應接ヲ処時刻相移リ終戦ニ至遺憾ニ至ニ候素ヨリ宿怨ヲ等ニ無之方
ニ国民ヲ苦メ候不本意ニ事ニ候和美ヲ希ヲ外ニ他事ニ候
命令ヲ処實ニ容易ニ非ス家老ヲ利出雲申述候以上

元治元年
八月九日

松平大膳大夫
慶親

○御褒勅

殿様當五月傳奏野宮中納言被仰達被遊
下不容易樣亂之処早速　御參内御警衛　御勤速ニ及鎮靜ノ條
叡感　思召ノ旨被蒙　御褒勅於小御所被為拜　龍顏　天盃被遊
御賜戴ノ儀ニ候ニ付五月四日
右於若所礼服ヲ賀有之由大樹公ヨリ布告ニ付各ヨリ何モ

○元治元年甲子八月江戸小傳馬町三丁目番屋脇ニ捨文ヲ寫

一筆啓上仕候書狀ヲ以奉申上候
一小傳馬町三丁目月行司ヨリ次第書ヲ以
御奉行樣　大久保加賀守殿
　　土屋伯耆守殿
御觸有之候ニ付ては別紙寫通被申渡候ニ付此段申上候以上
　　小傳馬町三丁目
　　御年寄
　　六三郎印

元治甲子八月捨町ニ有之張書
告文之事
今度長州人京師ニ事ヲ作ス二度ノ追討ヲ下シ追々御進發ノ
ニ及ヒ猶又ヲ以テ御追討ヲ下シ近日御進發ノ御模様ニ候然ル
ニ其ノ罪ヲ知ラス德川氏ヲ滅亡セント招ク天誅ヲ甚シキ
他ノ征センヨリ征ヲ受ケザル用意ヲ布キ又ハ関東ヲ呼寄
其罪逆挙ヲ見ヲ安放ニ致ス不ヲ幕賊兵糸和此両三年ニ累

一本如条筆ニテ前文訴書ヲ是ヲ元ヲ所ニ捨文セルモノナリ

政事革ト雖モ申井伊安藤等ノ弊習除キ難ク免角夷賊ヲ以テ
後ノ厭ヒ攘夷鎖港ヲ唱ヒナカラ心外全ク親睦ヲ懐キ朝幕
協合ニ恐多モ朝威ヲ推カンド謀リ誤リ心ニ自大ノ勤王ヲ表ニ
立テ奉ラ名トシテ漸ク殿慮ヲ挽メ奉ル処ヲ以テ是迄攘夷之
機ニ乗シ海内ノ賊有センコトヲ巧ミ中川宮ニ事ヲ計リ禁廷ヲ
欺キ陰悪シテ公武徳川氏ノ腐心ト勢ヒ
至テ悪ノ業ヤ三郎事元来残忍ニ徒ニテ昨春上京連綿ト
而ケ年来ノ願ヒ王地夷賊踵跡ヲ接シ多クノ忠臣ヲ戮言ヲ
ヲ不ラ忠ニ国賊ヲ成シ順聖公ヲ幽シ報国烈忠ヲ賢俊ニ于其骨肉ヲ請ナ
カラ皇国国ヲ思義ヲ妄動ヲ攘夷ヲ忘却シ攘夷ト変ジ
一人ハ免リ給ヒ数万ノ蒼生ヲ陥レ国家益ヲ
当時ヲ国害ヲ可知ノ事ヲ長州王攘夷勤メ其士民婦女ニ至
迄士義ヲ墓ツキ幕徒深ク悪ミ女賊会津ホト事ヲ謀リ中川宮
ニ条関白ホラ以テ攘夷ヲ海岸不利ヲ説ヲ肇密奏ヲ類ニ長州ヲ失
ヲ賊ヲ逐ニ非軍実船打掃ヲ罪ヲ負セ勅勘ヲ蒙リ奉ラーむる、
至リ嗚呼赫々タル天日モ雲霧ニ覆ヲモ勤
隔リ事誰カ狐疑驚疑セザラン是偏ニ真ヲ
愁訴之為メ先使テ長州人上京ノ事伏見ニ支ヘ歎願ヲモ不聞入ラ
主上ヲ賊地奥根ヲ城ヘ遷シ奉ラんト謀リ且正義ヲ長州ヲ可討之令ヲ出シ

不得止ヲ會津彦根薩州越前ホノ兵
朝廷ヲ幕府ニ對シ敵スルニ存意ハ毛頭無之ト雖
ヲ不受ヲ以テ其情實ヲ探スヘシ然ルニ
伐ヲ謂ハ不義之令名ノ軍也先達テ會津ヲ姦賊ト惡名ノ長州ヘ抱
ン爲ニ向ヒ禁廷發砲致シ叡ヲ困シム人情ノ
ヲ讓リ玉ヒ不堪ニ至ル也右復仇ノ事件尚
當春幕吏小笠原圖書頭其外ノ姦賊ヲ多ク
ヲ禁シ山崎淀ヨリ兵ヲ朝敵ト根本ヨリ
可受ノ處更ニ其沙汰無ヲ幸ヒ京攝ノ
服ヲ上家名斷絶ヲ必定ノ義也三戈ノ童子
後ヲ石付彼ヲ上命ヲ御免ハ何事ヤ内實ハ
詭計有リ且又當夏黒田侯ヲ建白ニテ
儕輩多ク蜂ト京地ニ於テ嚴重ニ申ラル處
沙汰可ニ及ハヽ申指置ル分當月上旬右ノ催促ト
拳テ知ル所也實ニ社稷ノ權ト賊船橫濱ニ引當テ寧ロ儕復ヲ加ヘ幕吏暴政ヲ
士民ヲ不服ヲ招ク而已ナラス　歟慮ヲモ蔑如ニ奉ル之至也當七月六日幕
吏佛英ヲ夷狄ニ長州征伐頼入即日ニ六艘橫濱表出帆ス事是亦何事
ゾヤ已ニ暴逆ニ與ヒサル迚
皇國内ニ夷賊ヲ向ケ所置ヲ落賊ニ越ル所迚
ラルヽヤ當春營中ニテ英佛ヲ相賴ミ防長ヲ打爲ル歟ヲ數百萬ドルニテ幕府ヘ可貢
取計ラヒ政ヲ由實ニ國ヲ賣ニ國賊ニテ肉ヲ喰ヒ血ヲ呑ムヲ不飽也當節夷
賊ト謀ヲ合ヒ内外ヨリ防長ヲ攻メ入ル手段ニ斯ル淺猿ノ幕賊ヲ止諭候ニ於テハ
攘夷同心之諸侯次第有之
改テ賊夷ト同心致ス右様醜夷ノ親愛深キ中ヘ鎖港ト談判ヲ兩ヒ難ノ

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

依て當復水濶正義之士ハ各奮之衆ヲ以今茲亦ヲ錮幕賊ニ隨ひ諛ひ女妓ヲ
其機ニ臨ムヲ時トシテ中納言殿鎖港ノ事任ニ水府ニ頽港ニ改更ス多ク唯口
ニ鋒有リ筆竟鎖港之念更ニ無之
ニ而已其説ヲ唱ヘ内衛ニ流レ朋天請頻ニ旦難遁刑勢ヲ以四冬ニ八月池田
筑後守外二人右ヲ訣判外國ニ被遣下砌事ヲ成否ニ不拘三年之星霜ヲ経
テ帰朝可致ト深ク申含ノ置ヲ由ヲ以テ其節未タ帰ラ名トシテ滞滝可延
巧ニ乃チ空喪外蛮ニ日數ヲ可移謂レ無キヲ有當夏内府ノ朝約ヲ北月ニ
咎ヲ以采地返納候ニ而ハ柳詣品交易ニ倭ハ彼ノ窓願ニ付
許ニ罷下ヲ新申ニ逆使ニ申渡ト迫ヲ更ニ異論ヲ立ル全体拒絶ニ至情
多ク故ニ姑ク廻ラン為ノ不存ニ右ニ暴策ヲ揣ひ海外ニ辱ヲ残スヲ而
已ナラス恐多クモ朝憲ヲ軽ンジ奉ラ此一事ニ
業ナラスヤ将又當節筑波蜂起ニ係ル其根源ヲ美狄ニ跋扈ヲ悪ニ国家
ニ鞅掌救済ノ一挙ニ有ル河越板倉両候ニ奇計ニ如ク浪士ヲ以テ夷狄ニ攘
ヲ専トヒ東西ニ立ニ諮詢可致ノ如ク曲ニ其策ヲ不用六月ニ旬ノ數万
ニ金穀ヲ貴ニ数万ニ軍勢ヲ取揖終ニ暴ヲ以義ヲ伐テハ彼ヲ處ニ起リ其
スヘカラサル之理有ヲヒハ一度勝利ヲ得可申トヒ
謂徒ニ不可止是ヲ幕令ヲ紊悪ニ致ス一ツ
ヲ也、抑又、先日長州屋敷勤番ヲ老若ヲ
召、捕町半鐘数千ノ人足ヲ呼寄ヤ即時ニ家作ヲ手崩ニ而不至ハ乱心ニ決
也長州ニ遺憾ハ元亀各国列藩ニ情實ヲ不計是蓋ニ徳川氏ニ滅亡ニ如
ニ至ル哉嗚呼両三年来美政ヲ以テ賊徒ヲ遠ケ正義ヲ士事ヲ執ノ如此節ニ
至リ精廉ヲ士ハ悉ク夜退女ニ賊ト入替リ候事眼前見るやや近頃ある條對馬等
駕籠ヲ移除候ヲ不日再勤有ヘヒ嗚呼幕ヲ賊ニヒ当時ヲ形勢ヲ不知や
物價日ニ沸騰ヒ士民難儀ニ迫ヲ候ヲ更ニ擾攘ヲ念ナリ益交易ヲ行ヒ已ヲ親

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

睦スル所の蛮夷ヽ敢スレハ速ニ朝敵ヽ名ヲ設ケ勤
ヽ諸侯ヽ相與テ政府ヽ必定也即今報国赤心ト唱ユル中国ヽ西國ヽ雄
備前藩ヽ如キ因州阿波土佐ノ東国ヽ名ヽ尾州加州仙臺ノ藩堂ノ卑見
ヽ如ク天下ヽ人ヽ天ハシテン今偏ヽ衰
ヽ如ク猥リニ暴令ヲ觸出シ行ハ
幕ヽ家ヲ無ヽサント成サハ國家ヽ為メニ一策ヲ按ジ施スベシ筑波ヽ浪士ヲ以横濱
ヽ夷賊ヲ攘ハスヘシ是上策之無ラスンハ右浪士ハ國家ヽ忠憤ヽ死士ト成ハ攘夷
軍評ヽ間ハ暫ヽ氷戸家ヽ預ケ三ノ丸ニ入置ハ又長州人京ニ入ル事ヽ如
ヽ子細ヽ有ヽ征伐ヽ令ヲ下ス各ヽ依テ攘夷ヲ先陣ニ可仕旨ヽ奇
上ハ系勲ヽ一ツヽヽ不ヽ深憂ヽ申通ヽ先日ヽ手類ヽト家作ヽ已前ヽ如ク
夷作ヽ存又姦賊舎津ヽ不在後ハ
國体ヽ執ヽ若陽ヽ若ヽ治ヽ守護職ヽ任ノ有ヽ如ク勤
山子淳直ヽ改事ヽ三日ヽ不待ニ東西鎮撫改ル
神君ヽ無國セヽ人ヽ懐ケ夷ヽ攘ふを以改侍ス當時ヽ幕改ハ是ヽ反テ
夷ヽ受ニテ人和ヽ失ヒ國ヽ餐セントス嗚呼時ナル哉内地ヽ争乱ハ夷狄ヽ術
計ヽ陥ル所也前条ヽ依テ攘夷ヽ幕吏ヽ恥知ラス不然極ル所ハ彼ヽ
終ヽ封等ヽ受ニテ必定也是候
皇國ヽ
来降ヽ神地ニテ 天孫
受給キ三千年強國ヽ域名ヽ内外ヽ輝ヽ有一時ヽ彼ヵ奴僕ト成リ彼ニ化ン
ヽ如ク神国ヽ眷人也爰ヽ豺国監之士斯ル国辱ヽ見ン
ヽテ幕賊誅ヽ詠ヽ上奉ル
ニト不
子八月

列藩士心士

家宝巻全文ヽ写ヽ為ん世書改箇所ヽ特出ヽ異改変筆ヽ
ヽ其旨急度ヽ

○元治元年甲子八月廿七日朝大坂高麗橋張紙ニ写

定

一諸品売買ノ交易差支なく一ノ除ケ
一両中発動ニ付用金不用ニ可致候
一長物人体書人交旨差止メ候ニ付依テ勿論
仕方ニ一ノ令相伐ル事

右ノ条ニ背ク者ハ厳重ノ御咎ニ可及候間
右ノ趣ヲ以テ勿論ノ事ニ候

○

大坂表ニ於テ敬言ハ以後ハ免ス 仍テ此ノ旨
ホコタ取計ヒ候ノ筈ニ候

八月廿四日

○水戸家不穏事

水戸御館之内ニ当時ノ家中一万人程モ有之由ニ候ハヽ去月下旬ヨリ追々国元ヨリ着府
右ハ前中納言様ノ御届ノ家中ニ而ハ無之浪士之徒追討之義ニ付テハ
ヘヽ六百人程追討ノ人数ヲ差出候旨ニ而始終説ニ及戦闘ニ移之場合相成ト別而如何ノ
仕方ニ浪士之徒悉ク敗乱仕忽ちいつくニか欠退陣仕ル旨ニ而同ニ様ノ人数引上相
成依之諸家様ニも人数ヲ以テ差配ノ必死之備ニ而ハ無之一ト先ツ人数先ツ
在テノ形勢ヲ一ト目ニ浪士ニ勝敗相付ル内ニ早ク人数引上ニ相成ト候ヘハ如何ニも
謀略ニ長ケ候ニ付多ク市諸家様方ニ而ハ疑惑有之ニ付テハ其差向ヲ致方モ多ク更々
ノ人数ヲ引上ニ相成ル中ニ全ク 右浪士ト水戸様ヘ城内ニ駈込ノ者ト多クノ筈ノ
実ハ水戸様ノ家来ノ内ニ仕立致シ置ニ而ニ仕立候ニ付依
之其後 公義ニ支々ノ令ニ相成ル中水府様ノ人数之内ニ彼浪士共ヲ仕組致シ

置見体を厳重ニ可見拵ニ候内記を不容易ニ論見ニ有之一体前中納言様
附ニ家中等ニ當主様附ニ家中取交ニ家老
ニ至ル迄ニ去月廿五六日比於ニ国元ニ家中同志打初ニ而ハ大騒成様子ニ座
ニ内依之ニ而中納言様ニ家老ニ而在此候ニ付ニ而ハ外見ニ抱り如何ニ候ニ付一
難量ニ候ニ付ニ而ハ被ニ対ニ公義ニ三家之立場柄深キ心慮ニ有之ニ候ニ家
中ニ真偽を糺し其筑波山楯籠之浪徒ニ於ニ而ハ不得止度談ニ
仰付ニ候ニ而ハ
一万石常州宍戸 松平大炊頭様
但戦士二十人ニ而家ニ来降ニ
右ニ通ニ仰付今三日ニ出発ニ相成ニ義ニ候ニ右ニ而ハ此上如何ニ成
ものや難計段風評仕ニ候ニ付ニ石川ニ而ハ家老ニ而ハ慶事ニ有之義ニ付ニ而ハ
元ニ前限之騒動ニ而ハ無之ニ而ハ此ニ而ハ屋形ニ而ハ
故ニ家中一致ニ而ニ義ニ付ニ而ハ今ニ形勢不穏義ニ而ハ
八月

○

豹死留皮豈偶然　　湊川遺跡水連天
人生有限名無盡　　楠子精忠萬古傳

右ニ水戸藩ニ而ハ名代ニ而ハ大炊頭様ニ而ハ
井上河内守様ニ而ハ御ニ而ハ御用通ニ而ハ右ニ用勢ニ而ハ前ニ而ハ
右ニ水戸藩ニ而ハ名代ニ而ハ大炊頭様ニ而ハ御ニ而ハ御用通ニ而ハ右ニ用勢ニ而ハ前ニ而ハ文字扇ニ而ハ添ニ而ハ添ニ而ハ

○在横須賀公書通ニ云
水戸表浪士ハ筑波ニ而ハ挙兵田沼玄蕃頭出張ニ而ハ
府ニ行ニ而ハ大炊頭ニ而ハ宿ニ而ハ宿ニ而ハ宿ニ而ハ合和睦ニ而ハ府ニ而ハ大炊頭ニ而ハ謁居ニ而ハ仰付ニ而ハ是ニ而ハ水戸

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

陰居存念之有ニ通居岡ニして新大当相立之中ニの義ニ此等陰居附ニて水戸ニ下り南ニ
附ニ者ニ勝手候ニ出府いたし候ニ下町ニ住居ニ我等ニいたし候の義ニ
○在府鈴木某ヨリ書状 九月十四日
松宇大炊ヨリ陰居筑波山頭取ニ而の指ニ付永蟄居ニ仰付ニ
長お討滅ニ仰付 ニ而ハ急ニ御出立ニて御陣代ニ而出陣ニ
ニ付陣代ニ而出陣ニ月ニ弟ニぬ立ニ而の家来何れも力ニ
松宇御発ニ付老中ニ仰付ニて直ニ筑波山ニ而名代ニ仰付四日ニ而出陣
我ニすニ一寸遠ニ一両日ニて合ニ而ニ而家中
ニ仰付ニ而ニ而師直ニ而ニ直ニ而出ニ而四日ニ而
○野沢高根沢宇津下代ニ話
結城ニ代ニ陣ニ而根津ニ而ニ而ニ而

○野呂貝利ニ八月廿二日深書ニ写

一水兵活人ニ成ル時松ノ引石ニ恠ミル土浦松一書ヲ二書ヲ守探出シニ於テ合戦ヲ築波方大敗軍ニ引石活士ヨリ又ヲ兼討仕ヲヲ之書ヲ開ヲ見ル段伏勢居ヲ付是又大敗軍仕ヲ築筑波勢ヲ諸ニ経歴シ廿五日水兵ヲ悩ヲ押寄一書ヲ開ヲ二書ヲ守都ヲ左ノ二書ヲ西水兵方物大将ヲ山野辺ヲ軍大将朝日ヲ添ヲ守探ル町七軒町ヲ探出大合戦ニ築波勢大破軍討死五十八人水兵方ヲ死一人ヲ手負人十八人ヲ有ル仍大砲ヲ町ヲ放四五丁焼失仕ヲ守田中源兵衛逃軍ニ及ヲ討死シ又兼中村主ヲ知ヲ手ニ帰ヲ乱ヲ捨一人活士陣ヲ居ヲ書ヲ取ヲ守都ヲ又ハ活ヲ討ヲ取ヲ守都ヲ又ハ活ヲ散乱ニ居

○參謀山縣少佐陣營ヘ遠望ノ略圖

上方ノ本書ノ内ニ長州老藩ノ榮衰依然如何ノ義ニ付一尾州根ノ義ニ付長
生案出ノ由之ニ當時ノ情態ヲ以テ考ルニ尾州根
初阿州德川細川松平抔ト評シ 御所ヘ參内ノ節
江戸ヘ近便ヲ以テ後ヲ表ス近便ノ義ハ
遠ノ事ヲ云

○鷄竜宅狀

八月廿七日夕方大坂天保山向ヘ異船ノ
又廿人數出

御固場

常吉新田

清書廿二人ヅヽ

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

布屋新田
西島鳴

陸家老之見込
昼八時比大坂町奉行松平大隅守殿ゟ異船紀州沖ニ退帆ニ付引合状届
七ツ時到着
布屋新田ニ書府ニ旧府会所ニ中お書士四人ニ従者人ニ逗留四人小者人一人
北傳法村ゟ三十丁海辺誠ニ大田舎ニ而人ニ
三ヶ所ニ持場ニ而昼夜ニお勤
㊉松源内状抄ニ昨廿九日ニ京大坂ゟ之医者ニ従者ニ付決して不用
一筆ニ申遣候ニ付ニ京大坂ゟ之

（五）
逗留二十人ニ
（六）
諸物頭ゟ人
同断ゟ人

（六）
（六月）
（廿九日）
（廿九日ニ京大坂ゟ之医者ニ従者ニ付決して不用）
（五）
（堂舎ニ大砲三門ニ而
五人ニ而引合ニ而
十三人）

多ニ而ニ付右ニ付昌ゟ小倉ニ而兵糧方ゟ一万ニ相求新調仕今ニ而不容易形勢
ニ而所ゟ訳ニ而ゟ之夜具ニ物ゟ相仕舞ニ

一賄ゟ之ニ而ニ而ニ如此ニ始終賄所ゟ持ニ而ニ
上ニ迷惑ニ而ニ而ニ而

四半頃ニ石藏ニ多ク人間ニ入ル之ニ付キ

○松木氏伊法村ヨリ之通抄

一去ル十五日夜四時頃（八月十七日）ニ名中法川辺ニ持場ヨリ松木氏伊法村ヨリ注ニ付伊法村ニ罷越候処

私ヲ名ニ京ニ五十人ニ書頭松三洲寛ニ家老矢但州ニ旗本ヨリ名ニ出ル物頭金忠助

一人ニ足軽百人ニ目付岸太ニ使番原半ニヨリ名ニ私ヲ義ヲ主ニ名ニ衣服ヲ着ス是ハ

ニ丹ニお収ニヨリ名ニ食餅お仕着　御本陣ニ着到お改ニ伏見高ニ武士右ヲ私ニ

多七時伊法村ニ名ニ高陣ニ同村西光寺ニ本事ニ庫裡ニ五十人ニ下部具足櫃

村一人挟村一人上下ヲ五十人ニ注人ヲ名ニ四ツ夜中ニ着ス私ニ一杯ニ

其勢ニ翌朝迫押ニ名ニ進ム者ニ十七ヲ名ニ

所尼ヶ崎街道ニ往来ノ人ヲお改伊法村中法川流末ニ諸士ノ廻船お改ル

吏役ヲ実ニ名ニ存ス私ヲ被長州ニ押ヲ当ル名ニ大敗北ニ場ニ歩

砲ヲ或ニ焼ヲ或ニ壊ヲ大概ヲ実ニ奪ル僕ニ死傷ヲ数ニ長州方少ヲ

敗走ニ付ニ陣場ニ地雷火ヲ仕掛逃去ニ付キ

悪ク地雷火ノ火ノ廻リ方不宜ヲ為ニ

破烈ニ至ラ之右ニ場ニ勝安房ヲ

人ヲ中通ニ長州ヲ義ヲ征討　公辺ヲ

自然長当ニ対シ免ニ終ニ次第ニ　公辺ヲ

ニ岡依之和議お整ヒ私ヲ当ル頃ニ

山辺ニ一名砲迫ニ朝直ニ紙ヲ（本ノマヽ）奥ニ

一当ル名議ヲ進京都ニ宇ヲ之ニ罪ニ

ニ限不取ニ私ニ付征伐ニ仰ニ此方様ヲ

此方様阿部侯陸路ニ行ヲ辞ニ

四半頃ニ石藏ニ多ク人間ニ入ル之ニ付キ

○松木氏伊法村ヨリ之通抄

一去ル十五日夜四時頃（八月十七日）ニ名中法川辺ニ持場ヨリ松木氏伊法村ヨリ注ニ付伊法村ニ罷越候処

私ヲ名ニ京ニ五十人ニ書頭松三洲寛ニ家老矢但州ニ旗本ヨリ名ニ出ル物頭金忠助

一人ニ足軽百人ニ目付岸太ニ使番原半ニヨリ名ニ私ヲ義ヲ主ニ名ニ衣服ヲ着ス是ハ

ニ丹ニお収ニヨリ名ニ食餅お仕着　御本陣ニ着到お改ニ伏見高ニ武士右ヲ私ニ

多七時伊法村ニ名ニ高陣ニ同村西光寺ニ本事ニ庫裡ニ五十人ニ下部具足櫃

村一人挟村一人上下ヲ五十人ニ注人ヲ名ニ四ツ夜中ニ着ス私ニ一杯ニ

其勢ニ翌朝迫押ニ名ニ進ム者ニ十七ヲ名ニ

所尼ヶ崎街道ニ往来ノ人ヲお改伊法村中法川流末ニ諸士ノ廻船お改ル

吏役ヲ実ニ名ニ存ス私ヲ被長州ニ押ヲ当ル名ニ大敗北ニ場ニ歩

砲ヲ或ニ焼ヲ或ニ壊ヲ大概ヲ実ニ奪ル僕ニ死傷ヲ数ニ長州方少ヲ

敗走ニ付ニ陣場ニ地雷火ヲ仕掛逃去ニ付キ

悪ク地雷火ノ火ノ廻リ方不宜ヲ為ニ

破烈ニ至ラ之右ニ場ニ勝安房ヲ

人ヲ中通ニ長州ヲ義ヲ征討　公辺ヲ

自然長当ニ対シ免ニ終ニ次第ニ　公辺ヲ

ニ岡依之和議お整ヒ私ヲ当ル頃ニ

山辺ニ一名砲迫ニ朝直ニ紙ヲ（本ノマヽ）奥ニ

一当ル名議ヲ進京都ニ宇ヲ之ニ罪ニ

ニ限不取ニ私ニ付征伐ニ仰ニ此方様ヲ

此方様阿部侯陸路ニ行ヲ辞ニ

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

別紙

一 近日の時勢陽捨之義初ハ堂吉新田ゟ中津川流末迄之中ハ所堂吉ニ続き一島ゟ所々ゟ府中石関ゟ通矢倉両面島布屋迄之北ハ尼ヶ崎領南ハ天保山続ゟ安治川流末井伊家の持ゟ天保山築立大砲据付ゟ所々ゟ如又南ハ木津川尻ゟ本松辺迄此度の持之処ゟ右ハ堂吉ゟ堂場ゟ一円ニ築立ゟ所々ゟ且近辺新田等ゟ多分大坂持九布屋堂ゟ海岸へ杭木十ヶ年ゟ多年近ハ前ゟの処ゟ所々ゟ堂場ゟ出来陸ト迄ゟ切を掛候ゟ七ヶ通ゟ有之耕作ハ勿論ゟ所々ゟ堂場ゟ所々大石百万坪ゟ之ゟ田畑を上田ゟ熟田ゟ中ハ大石ニ而埋立ゟ所々ゟ海辺ゟ盆達迄之処陣所ゟ取建ゟ所々ゟ

一 近頃ゟ船の津ゟ節毎ニ所々ゟ津を改ゟ帆形違ゟ見へゟ所ゟ船ゟ日本船ゟ外ゟ船製ニハ違ゟ事ゟ津を改ゟ近者ゟ二日の処ゟ印有之ゟ事ゟ笑止ゟ事ゟ布屋の北尼ヶ崎城ゟ傍二十町ニ過ゟ所ゟ西ハ西宮此ゟ二里位ゟ海岸ニ而ゟ当ゟ不足ニ付ゟ当時ハ兼ゟ当家持ゟ庶ハ大松俵積ゟ所々ゟ堂場ゟ所々ゟ人数少ゟ所ゟ実備ゟハゟ存候ゟ秘事ゟ而ゟ表ハ佛壇ゟ家ゟ体ゟ制今以更ニ石おゟ之ゟ唯数鳥ゟ事ゟ〇当侍従ゟ京都ゟハ十二三ゟ之ゟ通ゟ陽り其上侍ゟ従ゟ之ゟ哉不ゟ明ゟ之ゟ降ゟ〇ゟ之ゟ様ゟ漸ゟ之ゟ悪ゟ成ゟ下雑ゟ当時最ゟ品ニ而ゟ中噂ハ石宮当所の奥ゟ泥ゟ奥ゟ之ゟ事ゟ不面白ゟ事ゟ存ゟ

一 長州退計ゟ義依大将毛利内匠副将越前家ゟ伯出延此ゟ度又尾州家ゟ抜ゟ之処ゟ処今以ゟ上京ゟ之ゟ事ゟ何ゟ之ゟ事ゟ哉ゟ加州長甲受ゟ勢二千人程召連大坂本陣ゟ当ゟ一昨頃着長州へ談ゟ事ゟ未出立ゟ哉ゟ事ゟ薩州筑ゟ世子ゟ立ゟ之ゟ事ゟ廉ゟ之ゟ長州ゟ十ゟ二ゟ日ゟ合ゟ通退陣ゟ仕置ゟ待ゟ之ゟ処ゟ堂場ゟ取計ゟ中ゟ之ゟ筈ゟ

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

九月（本ノマヽ）皇陽敷於布屋我田楊

○九月七日牧野備前守按ニ河治

源八

松平筑後守

細川越中守

松平肥前守

小笠原左京之丞

小笠原佐渡守

小笠原近江守

小笠原幸壽丸

毛利大炤等初追討ニ仰付ニ付攻口ニ伐下ニ寄ニ山口ニ攻寄ニ落去ニ付ニ右ニ高ニ

唐中清水共攻落ニ又ニ山口ニ攻寄ニ落去ニ付ニ右ニ高ニ

○上加賀黄門公書

去ル七月十九日　禁闕毀ニ下炮火乱防玄冬未曾有ニ之高聴ニ被為達御案内ニ候義ニ可被為在ニ候哉ニ不及ニ申ニ候

八月十八日長州一件前後ヲ以徒ニ

敵慮ニ真偽ヲ争ヒ攘夷ニ

敵慮不貫徹而已ナラス都テ号令虚唱蒙昧ニシテ難渡今以

敵慮ヲ籠絡シ聖意ヲ蓋蔽シ諸侯正義ニ建白ホ一切上ニ不達諸事中途ヨリ之御挙動ニ相違有ニ之候ニ付ニ

十九日禁闕ニ

蒙ラシメ中諸侯ヲ動揺シ下億兆ノ人民ヲ損害ニ

好吏暴山ニ賊徒彼ニ

為ニ億万ニ市中家賊ヲ焼亡セラレ産業ニ離レ親子兄弟離散漂

泊或ハ孤独飢寒ニ者或ハ老人孝婦ニ

乗輿ニ途ヲ失ヒ焼亡仕ルニ

文化豪富ニ高家ニ至リ迄ニ

今日必用ニ諸品及ヒ珍宝伝来ニ書類

家業ヲ恨悉ク一時ニ灰燼ト相成物中奇珍ノ
多ク當時難得ノ多數古典ニテ記錄悉ク焼亡シ神社佛閣ニ宝物ト是
ニ准シ京地諸侯ノ屋敷ニテ記錄モ紛失ス
少旦日用ニ諸色一段ノ高ク分ル、物價俄ニ
日ニ増ス過ル酒死焼亡仕ル者ヒトシテ此節
ニ御仰仕上下一統天ニ訴ヘ歎息泣血霧憤切
勿論　幕府ニ一所懸命ヲ不忠者ハ
毛頭ノ人情ニ入津ニ及ヒ何ヲ次第ニ及ヒ
暴ヲ好ミ賊國ヲ乱シ乾輪傾覆シ
相成ル危急存亡旦夕ニ迫ル候ニ至テハ
御大義ニ正義ニ國君御賢明御仁徳ニ
敢テ歎願ニ及ヒ彼暴ヲ過激ニ賊等
害シ暴ヲ以推ス守護ス忠ニ唱上
候自ヲ仕ニ至ル、諸侯ハ勿論下万民ニ至
迄正義ニ繩紳精忠ニ候上　玉座ヲ遠離ニ
張ル説ヲ実上シ　御系ヲ押テ
宸襟ヲふさ奉ル安晴　暗ヲ
ヲ安寧ニ仕ル様ニ御熟考　御賢察
義暴戻過激ニ奸賊ヲ退ケ正義ニ御尽
関東ニ於ル、諸藩其ノ外ノ不
至近ニ治平乱ヲ以上ヲ安
　宸襟諸侯ヲ
安堵シ下萬民ヲ撫育ニ相成ル候後世ニ
　綸旨
　　　

等代不朽之御学徳を感戴し候途急倫、奉賀頌し謹言

元治元年
子 九月

加賀中納言様
御側御用人中

有志中

右勤務書を包み差出つゝ、何等の変に相成候とも、決而変心不申候旨、申遣す日乃ち不取敢
返書にて、写取採用仕候旨報知あり

○ 九月十日

稲葉兵庫頭様 大小目付様 御役所

今十日稲葉兵庫頭様 大小目付様 御役所より玉川一学
昨夜十二時比より御呼出しに付、罷出候処、別紙写之通り被仰渡候に付、則左之通り
承届候旨、御請書差出し候事

一 慶応 栄作

昨夜十二時比より御呼出しに付、罷出候処、別紙写之通り被仰渡候に付、則左之通り
承届候旨、御請書差出し候事

一 青井 五郎

右之通り被仰渡候に付、則左之通り承届候旨、御請書差出し候事

大目付
大久保紀伊守様

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

私共儀去ル廿四日御帆印差上ノ節
永雅丸ヲ英氣ヨリ釜大破損ニ付深
草ニ於テ仮修復ノ上廿六日私共儀
ハ御許ヲ請ケ出帆仕候ニ付
一御新書ヲ以テ被仰渡候趣
御在所ニ於テ承知奉畏候
以上
十月 松平出雲守 弘孝寺
十月 松平出雲守下屋敷 桂巖寺

○九月十九日 松平土佐守家来
防長追討ニ付従 御所江
作州ヨリ百挺備差登ル之大船大
小共ニ百艘備差登ル之大船大
この仕様ハ作州ヨリ長ク船ニ私書有之候
ニ而帰帆之節ハ一艘ニ而ハ決而出帆仕間敷
旨ニ付深ク心ヲ用速ニ令離別城外ニ碇泊為致
其上ニ而御用状ヲ相渡候様仕度
尚又作州ヨリ差登候大船ハ
何艘ニ而も御用ニ相立候様
仕度
以上
九月 松平土佐守

○

一 松殿先般 禁裏御守衛御催
ニ付従江戸表 清所人数ヲ以テ御加
親王家建以来 御所ニ二條御城ニ
駐ニ付清所為改ニ横大井川渡守ヲ
右之通承知仕候申ニ付今般ハ
御免ニ相成候申ニ付此段

子

○十月十二日より廿日記

神原式部大輔様御家来戸田重馬（後作立）於新町宿馬士刑七ヶ条外ニ後有之由ニ而切捨ニ始末逗留相調ニ付、女共ニ而ハ御用向ニ付右有之上ニ而ハ実ニ御用ニ差支ニ付、於江府ニ而ハ御用ニ差支ニ付、右被人お有之候

○在京薩氏ヲ中越ル等條

一長州ヨリ伝伐ノ発向ノ大綱ヲ探ニ来ル十四日ヲ出陣ノ日ト定メ京師ヲ発シ石州ノ依治ヲ人数ハ不詳

御納戸役　山田登湖
御近習役　久保九左ヱ門
御吟味役　一橋義右ヱ門
御移ヲ調役　丸山保次
給人格ノ勤定役　宮本悟助
勤定役　竹内勇吉
口　倉田三郎
郡方物書　小林荘兵衛

程ヲ指ス大院用長持九八十挺
方ハ旗本ヲ多指ス何ノ様ニ
給ヒ人数ヲ東海ヲ又私ニ
承ヲ事ニ万人ヲ中事ニ

一越前松平ハ先ヲ一日ヲ前着別大納言様ヲ
一京師在留諸藩人ヲ名ヲ付長伐ヲ伐ノ何ノ軍議ヲ
遊興ニ従ヒ居ヲ士人中ヲ士人往来ヲ文ニ
士産指ヲ物ヲ求ノ打歩リノ者多
多ニ望ヲ文外行ヲ指ヲ
一京中ヲ大元屋受ヲ
ヲ付ヲ

一長州上屋敷ニ有リ日本一ノ弥ニ名歩盤ノ名匠死人性多四十六人
御進発御先供
弓同断　鑓根断　庄内断
弓同断　同御服供
上田断　同弓断　弓遠断
刀御先供
松本断　本多多落ち断

○多度ノ上京ノ節　　市博
献上ニ受　　千鯛
一浪人ノ者ヨリ述ル事
一神君様ノ定メ事
一神君ノ捷ヲ収事
一治世ヲ乱ト云事
一罪ナキ人ヲ殺事
一万民難渋ニ陥ル事
一静ニ為ヲ事
一諸色ヘ通シ事

十荷
十尾
一歳魚ヲ止テ賞ル節
一政事ヲ改テ賞ル節
一敵人引テ賞ル節
一戦国ニ討テ賞ル節
一治人拵テ賞ル節
一人壁ニ賞ル節
一交易止ク賞ル節
一大名止ク賞ル節

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3
ガラス使用

一治世の恩を忘れ
一賄賂を貪り権を
一心直くして学び
一役徳を慕い学び
一
一
一

○子九月廿九日

右江戸表去ル三百来ル上刻出来候間御届申候
以上
午後ニ及 午後寅刻ニ参ル刻ハ休ム
右ハ写ニ候

○

水戸餘八郎君三百人程ニ而、去ル廿一日在京之処一橋公ニ
有之ニ付、其節長岡有之迚ニ有之ニ付、少人ニ而ハ通行
必ス襲攻方ニ加ル者ニ故、此方少君ニ而ハ通行
迚ハ多人数ニ而ハ通行
僅ニ徴発ニ而ハ

高野藏書

筑波山浪士等檜笠備配遠見略図 土浦藩士所蟄云

惣大将
武田伊賀守
男体山
惣大将
田丸稲右衛門
女体山
大炮
檜尾村
浪士見張
浪士見張
浪士見張

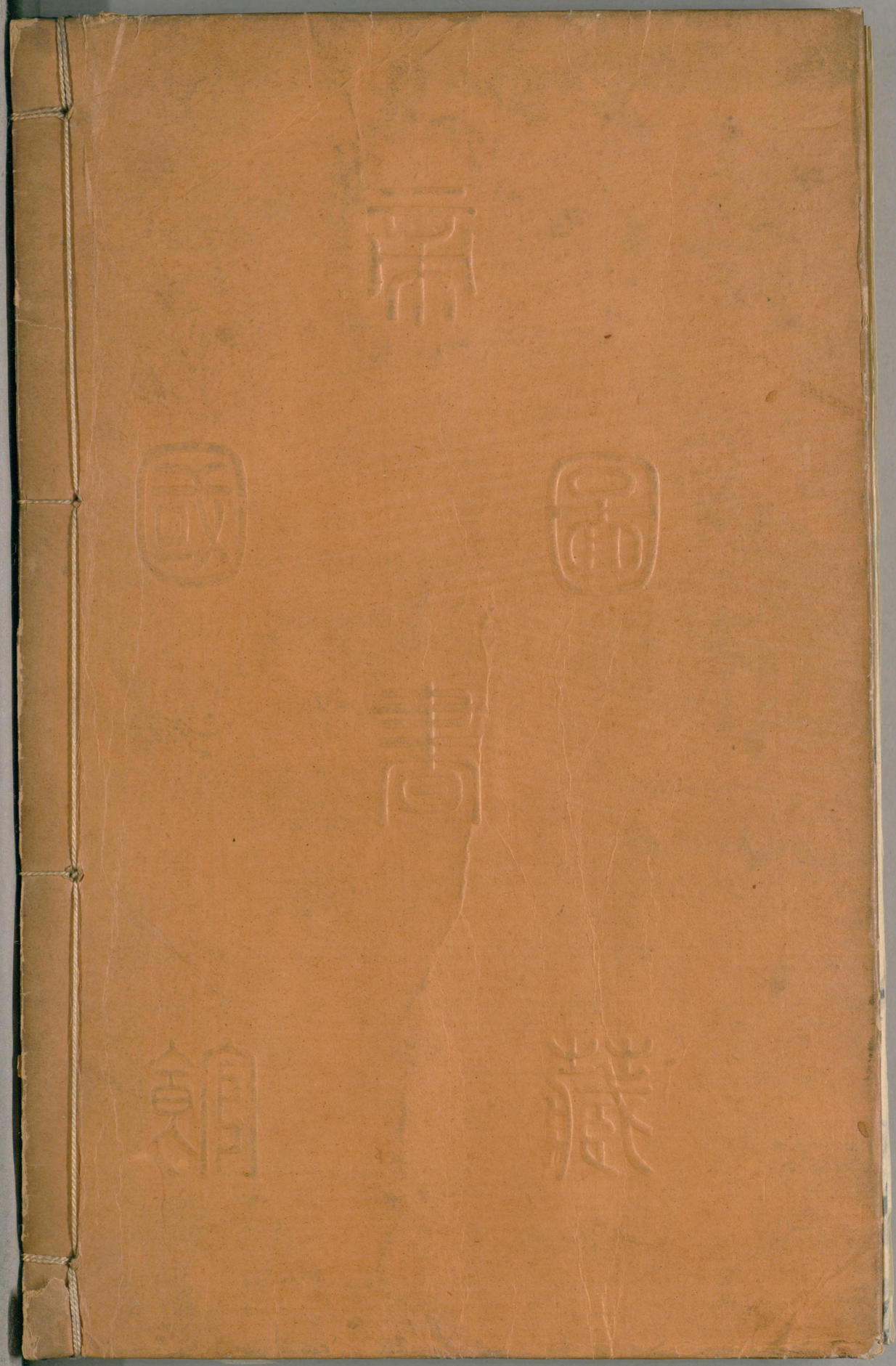
国立国会図書館　　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用

836
209
3

国立国会図書館　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『元治甲子紀聞』　請求記号 836-3

ガラス使用